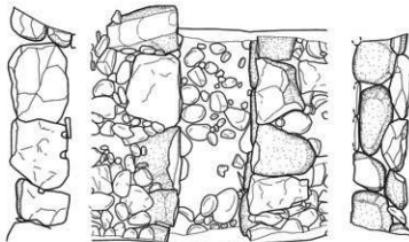


仙台市文化財調査報告書第479集

仙 台 城 跡 14

— 平成30年度 調査報告書 —



2019年3月

仙台市教育委員会

卷頭図版 1



1区2号礎石建物跡（南から）



1区全景（東から）



1区基本層断面（南西から）



1区近世整地層（VI層）断面（西から）



1区IIIa層出土豆甕（I-338）

卷頭図版 2



2区全景（南東から）



2区近世の地表面・KS-1134 暗渠状遺構（南から）



2区 KS-1137 石組溝跡（南から）



2区 KS-687 石組遺構（西から）



三の丸土型調査区全景（南から）

序 文

仙台市は、慶長 5 年（1600）に伊達政宗が仙台城の網張りを開始し城下のまちづくりをおこなってから四百年余りが過ぎた現在、人口 100 万人を越える東北地方の中心都市となりました。現在の仙台市発展の契機となった仙台城跡は、ビルが林立する市の中心部から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で市民から親しまれてきました。

仙台城跡は、平成 9 年度から 16 年度までおこなわれた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成 13 年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城期の実態が徐々に明らかになってきました。これらの発掘調査から得られた成果により、我が国の近世を代表する城跡であることが評価され、平成 15 年 8 月、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、「仙台城跡整備基本計画」が策定され、保存・活用のため、史跡の追加指定や本丸の中心建物である大広間遺構の復元整備もおこなわれました。

平成 23 年に発生した東日本大震災では、仙台城跡の石垣に大きな被害がありましたが、伝統工法にもとづく復旧に努め、文化財としての価値を損なうことなく後世に残すことができました。また、「仙台城跡整備基本計画」の策定から 10 年以上経過したことから、平成 29 年 11 月には新たな計画を策定するための「仙台城跡保存活用計画等検討委員会」が発足し、仙台城跡の新たな魅力を引き出すための取り組みが始まりました。

本報告書は、平成 30 年度に行われた造酒屋敷跡と三の丸土壘の遺構確認調査の成果をまとめたものです。造酒屋敷跡ではこれまでに 5 次にわたる調査がおこなわれ、酒造りに関係する遺構や遺物が見つかっています。造酒屋敷は城内で酒造りを行った全国でも稀な場所です。今回は、造酒屋敷の遺構確認と実態解明を目的に第 6 次調査をおこない、登城路と造酒屋敷地の排水に関する石組溝跡や、造酒屋敷地に存在した建物の位置が明らかになりました。

最後になりましたが、今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書は調査事業の内容だけではなく、調査成果を報告、公開するものでもあり、研究者のみならず市民の皆様にも広く活用されることで、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成 31 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

例　　言

1. 本書は、文化庁の国庫補助事業として実施した、国史跡仙台城跡の平成30年度遺構確認調査（造酒屋敷跡第6次調査：全体第30次調査、三の丸土塁跡第4次調査：全体第31次調査）の報告書である。
2. 本書に関する国史跡仙台城跡の調査については、平成30年4月24日付 30受庁財第4号の170にて文化庁長官の現状変更許可を得て実施した。
3. 発掘調査および整理作業は、鈴木隆・須貝慎吾・加藤智仁（仙台市教育委員会文化財課）が担当した。本書の作成は、I～IIIを加藤が執筆し、IV・Vを鈴木・須貝が執筆した。本書の編集は、鈴木・須貝が行った。調査および整理参加者：
太田裕子・桂島通子・菅家婦美子・田中春美・菱沼ミノリ・増田瑞枝・結城龍子
4. 出土した陶器の鑑定は佐藤洋（元仙台市教育委員会文化財課）が行った。
5. 木簡の樹種同定は、古代の森研究会に委託した。
6. 調査成果については既に各種刊行物などで公表されているが、本書の記載内容がそれら全てに優先する。
7. 発掘調査および報告書作成にあたり、仙台市博物館から御指導・御協力をいただいた。記して感謝する。
8. 本調査および報告書作成に係わる諸記録や出土遺物などの資料は、すべて仙台市教育委員会が保管・管理している。

凡　　例

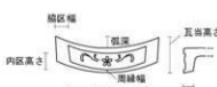
1. 本書中の地形図は、仙台市作成の現況測量図（1:500）の他に、国土地理院発行の1:50,000『仙台』と1:10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。
2. 本書の座標値は世界測地系に基づいており、図中の方位は座標北である。また、高さは標高値で記した。
3. 検出した全遺構に対し、通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS- ）を付した。
4. 本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・竹原：2001）を使用した。
5. 本書に使用した遺物図版の縮尺は、陶器類・土器類は1:3、瓦は1:6、金属製品・木製品は1:2を原則としており、その他の遺物は各図中に示している。遺構図版の縮尺については各図中に示している。
6. 遺物観察表の中の法量（ ）で示した数値は、陶器類・土器類については推定復元値、その他の遺物については残存値を示している。また、「-」は計測不能を示している。
7. 遺物の付着物等については、以下のスクリーンショットで示した。

[REDACTED] 塙・タール付着範囲

8. 遺物の計測部位については以下の図の通りである。



軒丸・軒棟・菊丸瓦



軒平瓦



平・契斗瓦

目 次

卷頭図版

序 文

例言・凡例

目 次

I	はじめに.....	1
II	仙台城跡の概要.....	3
	1. 地理的環境.....	3
	2. 歴史的環境.....	3
	3. 仙台城跡の発掘調査.....	4
III	発掘調査の実績と計画.....	5
IV	第 30 次調査（造酒屋敷跡 6 次）.....	7
	1. 調査の概要.....	7
	2. 基本層序.....	8
	3. 1 区の検出遺構と遺物.....	10
	4. 2 区の検出遺構と遺物.....	20
	5. 遺構外検出遺物.....	29
	6.まとめ.....	29
報告書抄録		
V	第 31 次調査（三の丸土塁 4 次）.....	38
	1. 調査の概要.....	38
	2. 基本層序.....	39
	3. 検出遺構と遺物.....	39
	4. 遺構外出土遺物.....	40
	5.まとめ.....	40
VI	総括.....	42

報告書抄録

卷頭図版目次

卷頭図版 1	1 区 2 号礎石建物跡（南から）
	1 区全景（東から）
	1 区基本層断面（南西から）
	1 区近世整地層（VI 層）断面（西から）
	1 区Ⅲ a 層出土豆甕（I-338）

卷頭図版 2	2 区全景（南東から）
	2 区近世の地表面・KS-1134 墓壇状遺構（南から）
	2 区 KS-1137 石組溝跡（南から）
	2 区 KS-687 石組遺構（西から）
	三の丸土塁調査区全景（南から）

挿図目次

第 1 図	仙台城跡と周辺の遺跡.....	1
第 2 図	仙台城跡周辺地形図.....	2
第 3 図	仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図.....	6
第 4 図	第 30 次調査区配置図.....	7
第 5 図	1 区断面模式図.....	8
第 6 図	2 区断面模式図.....	9
第 7 図	近・現代遺構平面図.....	10
第 8 図	1 区平面図	11-12
第 9 図	1 区断面図（1）.....	13
第 10 図	1 区断面図（2）.....	14
第 11 図	2 号礎石建物跡・KS-994 平面図	15
第 12 図	1 区遺構断面図	16
第 13 図	第 30 次調査出土遺物（1）1 区.....	17
第 14 図	第 30 次調査出土遺物（2）1 区.....	18

第 15 図	第 30 次調査出土遺物（3）1 区.....	19
第 16 図	近・現代遺構平面図.....	20
第 17 図	第 30 次調査出土遺物（4）2 区.....	21
第 18 図	2 区平面図	22
第 19 図	2 区断面図	23-24
第 20 図	2 区遺構断面図	26
第 21 図	KS-1137 石組溝跡 平・断面図	27
第 22 図	第 30 次調査出土遺物（5）2 区.....	28
第 23 図	第 30 次調査出土遺物（6）2 区.....	29
第 24 図	造酒屋敷跡第 1 ~ 6 次調査全体図.....	31
第 25 図	第 31 次調査地点の位置図.....	38
第 26 図	第 31 次調査区平面図.....	39
第 27 図	第 31 次調査区断面図.....	40

挿 表 目 次

第1表 これまでの調査実績.....	5
第2表 調査計画表と調査実績表.....	5
第3表 1区土層注記表	16
第4表 2区土層注記表	25
第5表 第30次調査遺物集計表.....	30

写 真 図 版 目 次

写真図版 1 第30次調査(造酒屋敷跡6次)1区(1) ...	32
1. 造酒屋敷地全景(北から)	
2. 北西部南壁(北から)	
3. 南西部北壁(南から)	
4. 南部ベルト断面(北西から)	
5. 段切構・近世整地層断面(南から)	
6. 2号礎石建物跡南辺部ベルト断面(南西から)	
7. KS-1141 構跡断面(南から)	
8. KS-1148 構跡(南西から)	
写真図版 4 第30次調査(造酒屋敷跡6次)2区(2) ...	35
25. KS-1137 石組溝跡(南東から)	
26. KS-1137 石組溝跡 西側縁石(東から)	
27. KS-1137 石組溝跡 西側縁石の矢穴(東から)	
28. KS-1137 石組溝跡 東側縁石(西から)	
29. KS-1137 石組溝跡 西側VII層断面(東から)	
30. KS-1137 石組溝跡 東側VII層断面(西から)	
31. KS-1140 性格不明構(東から)	
32. KS-1139 土坑(南西から)	
写真図版 2 第30次調査(造酒屋敷跡6次)1区(2) ...	33
9. KS-1143 ピット(南から)	
10. 2号礎石建物跡(東から)	
11. 2号礎石建物跡の位置(南東から)	
12. 2号礎石建物跡南辺部(東から)	
13. KS-1144・KS-1059 磯石跡(南から)	
14. KS-1145・KS-1144 磯石跡(南から)	
15. KS-994 集石遺構(東から)	
16. 志野向付(I-347)出土状況	
写真図版 3 第30次調査(造酒屋敷跡6次)2区(1) ...	34
17. 西部北壁(南から)	
18. 中央部南壁(北から)	
19. 北部西壁(東から)	
20. 北部(北から)	
21. 北部東壁・近世の地表面(南西から)	
22. KS-1134 暗渠状遺構(南から)	
23. KS-687 石組遺構断面(西から)	
24. VII層・KS-687 石組遺構他断面(南東から)	
写真図版 5 第30次調査(造酒屋敷跡6次)出土遺物(1) ...	36
写真図版 6 第30次調査(造酒屋敷跡6次)出土遺物(2) ...	37
写真図版 7 第31次調査(三の丸土塁4次) ...	41
33. 調査区全景(西から)	
34. 北壁・KS-1153(南から)	
35. KS-1147(西から)	
36. KS-1146(西から)	
37. 東側(長沼側)拡張部(西から)	
38. 東側(長沼側)拡張部(南から)	
39. 調査風景(南から)	
40. 職場体験作業風景	

I. はじめに

平成 30 年度は、国庫補助による仙台城跡遺構確認調査を下記の体制で臨んだ。(敬称略、順不同)

調査主体 仙台市教育委員会(生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室)
調査担当 文化財課 課長 長島 荣一 仙台城史跡調査室長 渡部 紀
主査 鈴木 隆 主事 佐藤 惠理 主事 須貝 慎吾
文化財教諭 加藤 智仁 専門員 工藤 哲司

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。(五十音順)

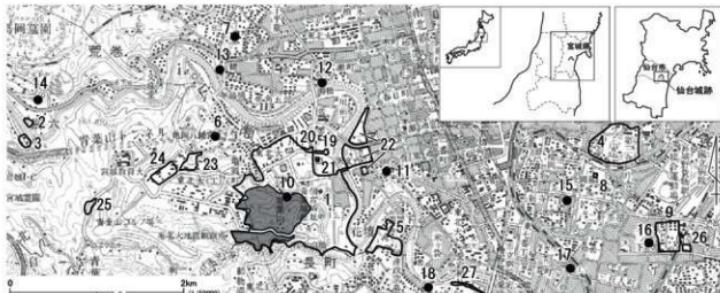
委員長 薩澤 敦(東北大学教授)※
副委員長 北野 博司(東北芸術工科大学教授)※
委員 奥村 啓子(一般社団法人東北観光推進機構推進本部 本部長代理)
委員 龍橋 俊光(東北大学准教授)※
委員 佐浦 みどり(有限会社東北工芸製作所 常務取締役)
委員 佐々木 貴弘(国土交通省東北地方整備局建政部 都市調整官)
委員 鈴木 未来(株式会社ラフ・アソシエイツ 代表取締役)
委員 永井 康雄(山形大学教授)※
委員 深澤 百合子(東北大名譽教授)※

仙台城跡調査整備指導委員会開催日

第1回: 平成 30 年 5 月 31 日 第2回: 平成 31 年 3 月 22 日

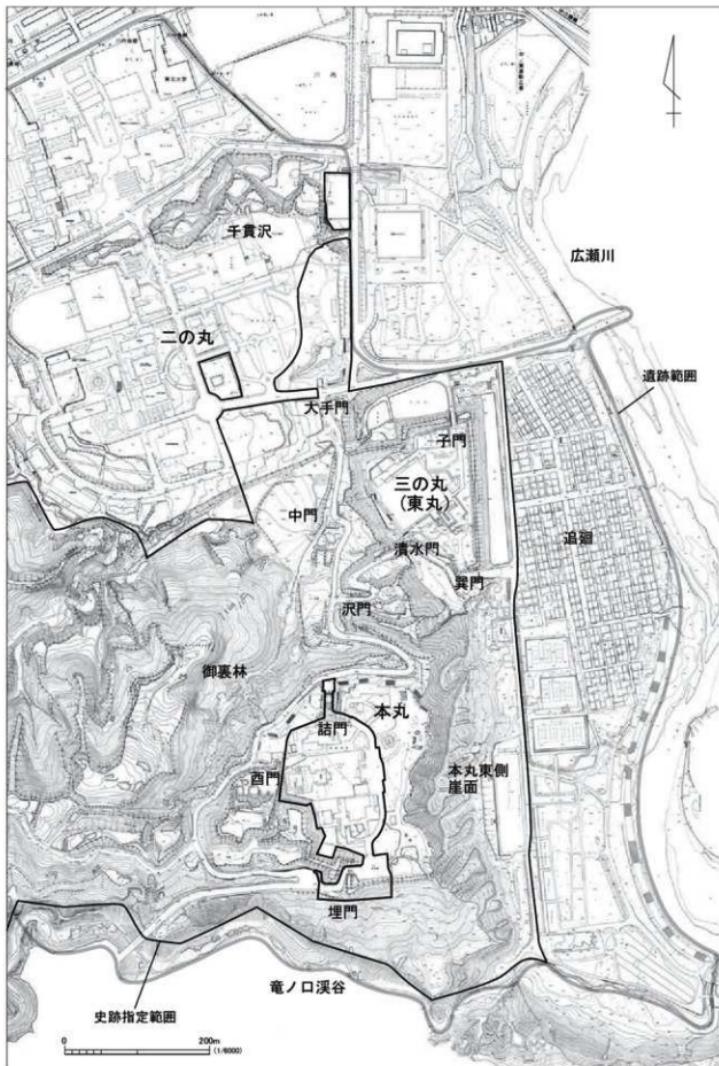
仙台城跡調査部会開催日

平成 30 年 11 月 12 日(出席者は名前に※表記)



城跡跡		板碑・石碑		川内 A 遺跡	
1	仙台城跡	10	川内古碑群	19	川内 B 遺跡
2	葛岡城跡	11	片平仙台大神宮の板碑	20	川内 C 遺跡
3	郷六城跡	12	鶴不動尊文永十年板碑	21	鶴ヶ岡公園遺跡
4	国分郷城跡	13	延元 2 年板碑	22	青葉山 B 遺跡
	神社・寺院・墓所等	14	鶴六日大日如来の碑	23	青葉山 E 遺跡
5	経ヶ峯伊達家墓所	15	成覚寺板碑	24	青葉山 E 遺跡
6	亀岡八幡神社	16	陸奥国分寺五輪塔	25	青葉山 C 遺跡
7	大崎八幡神社	17	三宝荒神社板碑群	26	愛宕堂東遺跡
8	三沢初の墓など	18	長徳寺板碑	27	愛宕山横穴墓群 A 地点
9	陸奥国分寺跡		その他の主な遺跡		アミカケは天然記念物青葉山

第1図 仙台城跡と周辺の遺跡



第2図 仙台城跡周辺地形図

II. 仙台城の概要

1. 地理的環境

仙台城跡は仙台市の中心市街地の西方にある、青葉山丘陵に位置する近世城郭である。仙台城跡は、大きく本丸・二の丸・三の丸（東丸）に分かれているが、それぞれが異なる段丘面に造られている。

本丸は青葉山丘陵の高位段丘である青葉山段丘面（標高 115 ~ 138m）に位置し、その規模は正保 2 年（1645）の「奥州仙台城繪図」に「東西百三十五間、南北百四十間」とあり一間を六尺として換算すると、東西 245m、南北 267m である。本丸の南側は落差約 40m の童の口溪谷、東側は広瀬川に落ちる 60m 以上の断崖に守られた天然の要害になっており、比較的傾斜の緩やかな本丸の北側には約 17m の高さを有する石垣が築かれている。尾根続きになっている本丸西側には藩政期に「御裏林」と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残っていることから、昭和 47 年（1972）に国指定天然記念物「青葉山」に指定され、現在は東北大植物園となっている。

本丸の麓部の河岸段丘上には二の丸と三の丸（東丸）が置かれている。本丸の北西に位置する一段下った仙台上町段丘（標高 54 ~ 71m）には二の丸が立地する。三の丸（東丸）は本丸の北東に位置し、二の丸よりさらに一段下った仙台下町段丘（標高 40m 程度）に立地している。各段丘面の間は段丘崖のため、比較的急峻な斜面となっている。

二の丸は、広瀬川に向かって流れる二つの沢に挟まれ、御裏林を背にした場所に位置する。東側の大手門跡付近には約 9m の高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和 42 年（1967）に再建されている。

三の丸（東丸）は外郭の北側と東側を水堀と土塁に囲まれ、南側からは本丸へと上の登城路として翼門から清水門、沢曲輪、沢門と続いている。三の丸（東丸）東側のより低位の段丘面の追廻地区には、重臣の屋敷や馬場が広がっていた。その東を流れる広瀬川の岸部分には石垣が残存している。

2. 歴史的環境

(1) 仙台城築城以前の歴史的環境

仙台城築城以前の遺跡として、後期旧石器時代から古代にかけての遺跡である、青葉山 A ~ E 遺跡がある。特に青葉山 E 遺跡では縄文時代の遺構・遺物がまとまって出土している。また、仙台城跡二の丸に隣接する川内 A 遺跡や川内 B 遺跡からも縄文時代の遺物が出土している。

御裏林の中には弘安 10 年（1287）と正安 4 年（1302）の板碑が立つ川内古碑群がある。仙台城跡が立地する青葉山にはかつて寺院があったとする伝承があり、愛宕山の大満寺虚空蔵堂は仙台城築城に伴って現在の地に移転したといわれ、中世の仙台城跡周辺が宗教的な場であったことを物語っている。

伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する 16 世紀代の文献記録では、天正元年（1573 ~ 1592）以降は廢城となったとされている。平成 10 年（1998）の本丸北壁石垣修復工事に伴う調査では、伊達政宗の築いた仙台城とは異なる時代の虎口・堅堀・通路などの遺構が検出されていることから、仙台城跡にはその前身となる中世山城が存在していた可能性が想定される。

(2) 仙台城の歴史的環境

仙台城は初代仙台藩主伊達政宗によって築かれ、幕末まで藩政の中心として維持された城である。慶長 5 年（1600）12 月 24 日に城の縄張りが開始され、慶長 7 年（1602）5 月には一応の完成をみたとされる。築城当初の仙台城は未解明の部分が多いが、千代城の縄張りを改変したもので、それまで千代と呼ばれていたこの地を政宗が築城の際に仙台と改めたとされている。絵図や文献によれば本丸には、慶長 15 年（1610）に完成した大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖に造られた懸造、能舞台や書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって作られた桃山文化の集大成と言える建物群が威容を誇っていたと考えられる。

築城当初は本丸や三の丸（東丸）を中心とする城郭であり、本丸や三の丸（東丸）からは政宗築城期の遺構や遺物が発見されている。石垣修復に伴う調査で築城期の本丸は現在見られる本丸の縄張りと異なっていることが明らかになっている。現在の本丸の縄張りとなるのは寛文 8 年（1668）の地震により被災した石垣の修復後と考えられる。ま

た、西脇櫓・東脇櫓・艮櫓・巽櫓などの三重の櫓は、正保3年（1646）4月の地震によって倒壊したとする記事がみられ、以後再建されなかった。

後に二の丸となる山麓部には、政宗の四男である伊達宗泰や長女である五郎八姫の屋敷があつたと考えられ、それを裏付けるような遺構や遺物が検出されている。寛永13年（1636）政宗の死後、二代藩主忠宗は宗泰の屋敷があつたとされている場所に二の丸の造営を開始した。それ以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸（東丸）・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していく。また、二の丸は貞享4年（1687）から元禄13年（1700）にかけて四代藩主綱村によって大きな改造が行われ、仙台城の基本的な構成が完成することとなる。

二の丸よりさらに一段下った仙台下町段丘上の三の丸（東丸）は、築城当初は政宗の屋敷があつたと考えられる。三の丸（東丸）周囲には土塁と土堀がめぐり、現在も残存している。二の丸が造営された寛永年間以降は米蔵が置かれたと考えられる。また、政宗が酒造りをさせた造酒屋敷が置かれた、巽門と清水門に隣接する平場からは、礎石建物跡井戸跡も確認されている。

（3）仙台城廢城後の歴史的環境

仙台城は、明治2年（1869）の版籍奉還を受けて二の丸に明治政府の勤政庁が置かれ、明治4年（1871）には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれることになった。それらの廻舎には二の丸の廻舎が利用されていたが、明治15年（1882）の大火によって全て焼失した。本丸も東北鎮台の管理下に置かれ、建物群は明治の初め頃に取り壊されたようであるが、正確な時期は不明である。

明治21年（1888）に仙台鎮台は陸軍第二師団となり、二の丸には師団司令部が置かれる。一方で本丸には、明治35年（1902）に昭忠碑、明治37年（1904）に仙台招魂社が建立され、招魂社は昭和14年（1939）に宮城縣護國神社となつた。

仙台城の面影を残していた中門は大正9年（1920）に取り壊され、国宝の大手門および脇櫓、巽門は昭和20年（1945）の仙台空襲によって焼失した。現在では大手門北側の土壇が江戸時代からの姿を残しているのみである。戦後、仙台城跡は米軍の駐屯地となり、中島池などが埋め立てられるなど造成が行われた。昭和32年（1957）に米軍から土地が返還されると二の丸のほとんどは東北大が使用することとなつた。三の丸（東丸）には昭和36年（1961）に仙台市博物館が建設された。昭和42年（1967）には大手門脇櫓が再建されている。本丸は神社敷地となっているほかは青葉山公園として利用されている。

3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡の調査は、昭和58年（1983）から継続的に実施されている東北大構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年（1983・1984）に実施された三の丸跡の発掘調査から始まる。本丸跡では小規模な試掘調査を除けば、平成9年（1997）の石垣修復工事に伴う発掘調査を初めとする。

本丸北壁石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の視点から石垣修復工事が行われた。石垣の解体に伴い発掘調査が行われ、平成16年（2004）に工事を終了している。この石垣修復工事に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣の変遷が明らかになった。

平成13年（2001）からは国の補助を受け、発掘調査のほかに遺構現況調査や石垣測量などの総合調査を実施しており、平成29年（2017）3月現在で29次にわたる調査を実施している。他にも、二の丸北部では平成16年より高連鉄道東西線建設事業に伴う遺構の確認調査および試掘調査が行われた。

平成15年（2003）5月に三陸沖を震源とする地震により、中門跡と清水門跡の石垣の一部が被災し、平成15～17年（2003～05）に災害復旧工事を行った。平成23年（2011）3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）では本丸跡と周辺崖地、大手門脇櫓、西門、中門、清水門の石垣などが被災し、平成23～28年に災害復旧工事を行った。

III. 発掘調査の実績と計画

今年度は、仙台城跡整備に向けて造酒屋敷跡（第6次）と、三の丸土壙（第4次）の遺構確認調査を実施した。

第1表 これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	大広間跡（1次）	185 m ²	平成13年09月17日～12月27日
第2次	清水門跡付近石垣測量	210 m ² （立面）	平成13年11月30日～平成14年02月13日
第3次	大番士土手跡・御守跡・塹跡	1,400 m ²	平成14年05月20日～平成15年01月31日
第4次	黄櫈跡	110 m ²	平成14年05月20日～08月31日
第5次	大広間跡（2次）	470 m ²	平成14年08月05日～12月20日
第6次	仙台城跡（全城）	約145ha	平成15年05月07日～08月08日
第7次	大広間跡（3次）	258 m ²	平成15年08月04日～12月25日
第8次	登城路跡	58 m ²	平成15年11月12日～12月25日
第9次	広瀬川護岸石垣測量（1次）	50 m ² （立面）	平成15年12月09日～平成16年02月05日
第10次	大広間跡（4次）	397 m ²	平成16年07月20日～12月24日
第11次	登城路跡・広瀬川護岸石垣測量（2次）	349 m ² （立面）	平成16年12月18日～平成17年03月31日
第12次	大広間跡（5次）	446 m ²	平成17年05月26日～16月19日
第13次	三の丸堀跡（1次）	88 m ²	平成17年11月01日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣測量（2次）	627 m ²	平成18年01月16日～01月20日
第15次	大広間跡（6次）	311 m ²	平成18年06月01日～08月04日
第16次	三の丸堀跡（2次）	522 m ²	平成18年09月01日～11月30日
第17次	大広間跡（7次）	263 m ²	平成19年05月28日～08月03日
第18次	三の丸堀跡（3次）	466 m ²	平成19年09月01日～11月26日
第19次	本丸北西壁石垣測量（1次）	425 m ² （立面）	平成20年01月16日～01月18日
第20次	大広間跡（8次）	248 m ²	平成20年05月08日～07月31日
第21次	造酒屋敷跡（1次）	160 m ²	平成20年08月26日～10月29日
第22次	本丸北西壁石垣測量（2次）	448 m ² （立面）	平成20年12月24日～平成21年01月21日
第23次	造酒屋敷跡（2次）	366 m ²	平成21年07月01日～11月12日
第24次	大広間跡（9次）	2,25 m ²	平成21年12月14日～12月15日
第25次	広瀬川護岸石垣測量（4次）	250 m ² （立面）	平成21年12月16日～平成22年01月07日
第26次	造酒屋敷跡（3次）	369 m ²	平成22年06月01日～10月31日
第27次	造酒屋敷跡（4次）	173 m ²	平成23年06月15日～10月31日
第28次	造酒屋敷跡（5次）	110 m ²	平成29年07月05日～11月15日
第29次	三の丸土壙（3次）	25 m ²	平成29年09月04日～11月15日

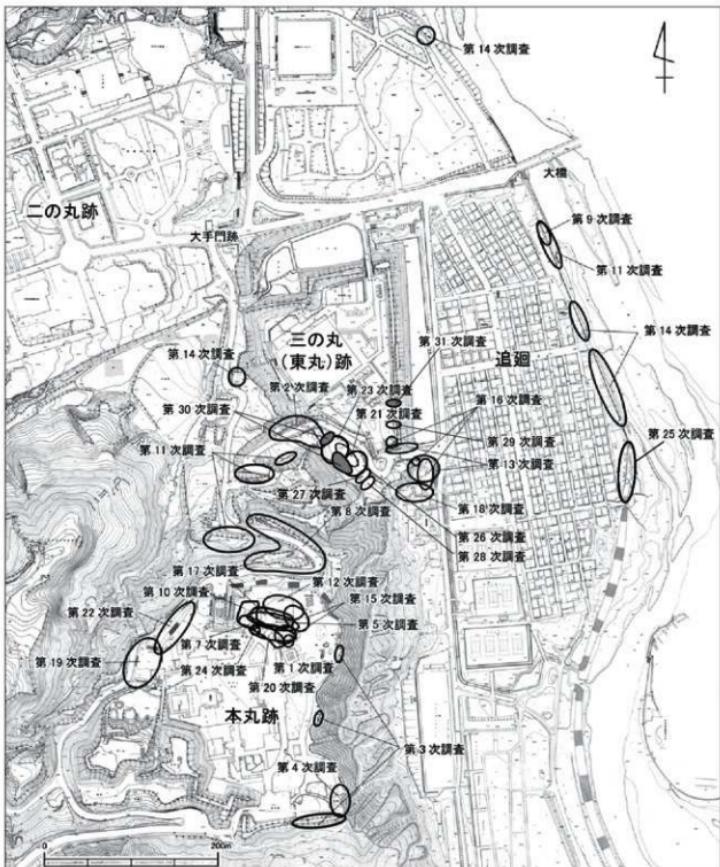
今年度実施した第30次調査は、平成29年に行った第28次造酒屋敷跡(5次)のすぐ北側に調査区を設定した1区と、造酒屋敷地北部に位置する2区を設定し、造酒屋敷跡の遺構を確認する目的で行った。第31次調査は、三の丸土壙において江戸時代の土壙の形状の確認、土壙上の遺構の有無の確認などの目的で行った。

第2表 調査計画表と調査実績表

調査次数	調査予定地区	予定期積	調査面積	調査予定期間	調査期間
第30次	造酒屋敷跡（6次）	357 m ²	334 m ²	平成30年 6月25日～11月22日	平成30年 6月25日～11月29日
第31次	三の丸土壙（4次）	16 m ²	17 m ²	平成30年10月 1日～11月30日	平成30年10月31日～11月29日

第30次調査では、屋敷に係る2号礎石建物跡の南辺の礎石跡を2基検出した。南辺の確認は、建物の範囲を知る上での大きな手がかりとなる。また、造酒屋敷地の北端では、硬くしまった面が検出され、近世の地表面の可能性がある。

第31次調査では、集石遺構を検出したものの、土壙等の手がかりとなるものを発見することはできなかつた。遺物は、瓦、磁器などが出土した。



第3図 仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図 (1/5000)

IV. 第30次調査（造酒屋敷跡6次）

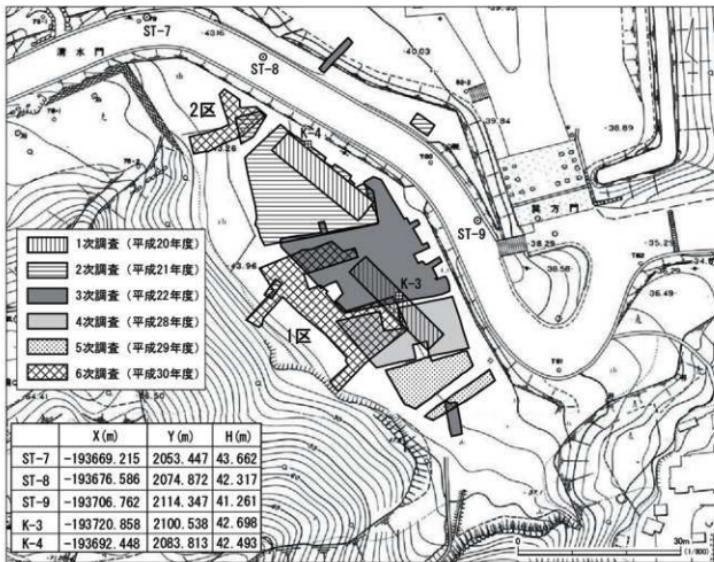
1. 調査の概要

(1) 調査目的

今回の調査では、2箇所の調査区を設定した。1区は、第3次調査(H22)区で確認されていた2号礎石建物跡の範囲確定を目的として設定した。2号礎石建物跡で從来確認されていたのは東辺部のみであり、建物跡の正確な規模や位置については確認できていない。今回の調査では、主に南辺部および西辺部の確認を目的とした。なお、北辺部については、第3次調査(H22)において近代遺構の掘削を受けていることが確認されている。2区は、屋敷地北辺部にあたる登城路との境界部分における遺構確認を目的として設定した。一部重複する第2次調査(H21)区(2区)からは、石組構跡が確認されており屋敷地北辺を区画する施設の可能性が指摘されている。今回は、この延長部または周辺の遺構確認を行なった。

(2) 調査方法

調査区は2箇所に設定した。調査区設定および測量時においては、過去の調査時に設置した基準点(K-3)および市道内に打設された測量杭(ST7・8)を元に基準点(K-4)を設置し、利用した。測量はトータルステーションを使用した。調査区設定後は、表土および現代の層を重機により除去し、その後人力による遺構検出を行った。



第4図 第30次調査区配置図

(3) 調査経過

現地調査は6月22日までに機材の準備および調査区の設定を行い、6月25日にフェンスや現地事務所を設置した。同日から重機による掘削を開始し、27日には1区・2区共にI層を除去した。6月28日から2区の調査を開始した。7月18日に硬化面を、7月23日には石組溝を検出している。1区は10月2日より調査を開始した。11月に入り、第4次調査で検出されていたKS-1059を2号礎石建物跡の南東角にあたる礎石跡として確認した。次いで2号礎石建物南辺部にあたるKS-1144礎石跡を検出し、概ね建物範囲を確認することができた。遺構の記録は平面図作成後、写真撮影を行った。11月21日には調査区全景の写真撮影を行った。11月26日より山砂を入れて遺構を養生した後に埋め戻しを開始し、翌日には終了した。11月29日に現場事務所なども撤去し現地調査を終了した。

(4) 普及活動

普及活動として、遺跡見学会と調査成果の発表を行った。遺跡見学会は、11月24日(土)に行い、150名の参加者があつた。調査成果については、12月8日に宮城県考古学会主催の遺跡調査成果発表会において口頭発表した。

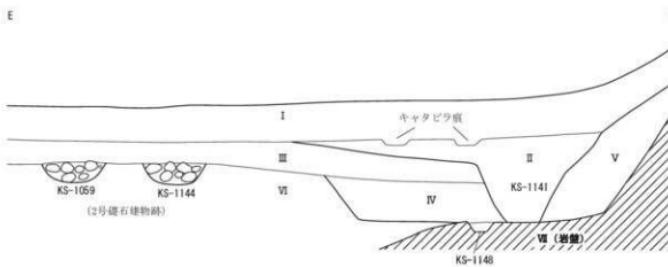
発掘調査期間中に、中学生の職場体験を受け入れ、発掘作業や整理作業を通じた職場体験活動に協力した。期間中に受け入れた中学校は6校である。(8月22～24日：仙台市立八木山中学校、10月16～19日：仙台市立上杉山中学校、10月31～11月2日：仙台市立将監東中学校、11月7～9日：仙台市立台原中学校、11月13～15日：仙台市立北仙台中学校、11月20日～22日：仙台市立広瀬中学校)

2. 基本層序

1区と2区において堆積状況が大きく異なるため、それぞれで調査区で基本層名を付した。以下、区毎にその特徴を記述する。

(1) 1区

1区では大別7層、細別14層の基本層を確認した。I～V層は近・現代の堆積土、VI層は近世の整地層、VII層は岩盤の凝灰岩層である。I層は、重機のキャタピラ痕が残るIIa層上面より上位の基本層を一括し、Ia～Ifの6層に細分した。概ね現代の堆積土と考えられる。II層は、KS-1141溝跡を埋めた粘質土でIIa、IIbの2層に細分した。調査区西端部にのみ分布する。遺物はIIa層からプラスチック製玩具が出土した。III層は、近世の整地層(VI層)上面を直接覆う堆積土で、IIIa～IIIcの3層に細分した。樋森家の廃棄により建物等が廃絶した後の堆積土である。IIIa層は旧表土で板ガラス片が出土した。IV層は、近代の段切遺構を埋めた堆積土で、IVa～IVcの3層に細分した。段切遺構は、第2・3次調査(H21・22)において調査され、今回はその延長部分を確認した。段切遺構の年代は本丸



第5図 1区断面模式図

において昭忠碑等が建設された明治30年代と推定されている（仙台市教育委員会 2011）。V層は、屋敷地西側の崖面からの崩落土の下部層で、V a、V bの2層に細分した。段切構造の底面を覆う堆積土である。

VI層は近世の整地層で、VI a～VI cの3層に細分した。VI a層上面は2号磯石建物跡の確認面である。遺物は、VI a層から18世紀代の大堀相馬産陶器碗、最下部のVI c層から17世紀代の瀬戸美濃産鉄輪香炉が出土した。

VII層はいわゆる広瀬川凝灰岩とされる岩盤である。調査区の西側では急角度の崖面をなすが、今回の調査区内ではKS-1141の底面で、平坦部を確認した。昨年度調査区においても調査区西端で岩盤の平坦部を確認している。

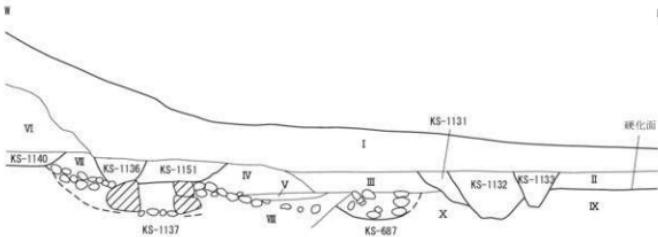
(2) 2区

2区では大別10層、細別45層の基本層を確認した。I～III層は近・現代の堆積土、IV～VII層はKS-1137石組溝の構築に前後する盛土層、IX・X層は近世の整地層である。

I層は近・現代構跡（KS-1131～1133）の埋没後から現表土までを一括し、I a～I lの12層に細分した。この内I c層は、昭和53年（1978）に発生した宮城県沖地震時の旧表土と考えられる。直上のI b層中には、地震による清水門石垣の崩落に伴い流出したと考えられる円礫が多量含まれている。II層は、近世の地表面（IX層上面）を直接覆う水性堆積土で、II a～II fの6層に細分した。調査区北部にのみ分布する。近代以降の大雨水等により堆積した土砂であると考えられる。遺物はII f層から板ガラス片が出土した。III層は、近代以降の堆積土でIII a～III dの4層に細分した。調査区中央部にのみ分布する。II層との前後関係については、III層が先に堆積し地表が一定の高さにあつたため、土砂（II層）の分布が調査区北部のみに止まったとも考えられるが、直接的には確認できない。

IV層はKS-1137石組溝跡の東側で確認した盛土層である。年代は、直下のV a層上面から、石材の加工時に出来たとみられる花崗岩片（木端石）が出土しており、近代以降と考えられる。2区に近接する第2次調査（H21）では、鍛冶遺構とともに多量に花崗岩片が出土している。V層はIV層直下の旧表土で、調査区中央部にのみ分布する。KS-1137石組溝の構築後に堆積した表土である。VI層は調査区西部で確認した盛土層で、VI a～VI hの8層に細分した。遺物は、VI h層から19世紀前～中葉の瀬戸美濃産碗が出土した。VII層は、VI層直下の整地層でVII a～VII eの5層に細分した。VII層には版築状の特徴がみられる。KS-1137石組溝の構築時あるいはそれ以前の整地層である。遺物は、VII a層から18世紀後半の小野相馬産皿が出土した。VIII層はVII a、VII bの2層に細分した。VII a層は、VII a層上面から直上のIV層に堆積するまでの旧表土の可能性が考えられる。VII b層は、KS-687石組遺構が西側の掘り込みにより廃絶した後の堆積土で、KS-1137石組溝の構築に伴う盛土と考えられる。

IX層は、調査区北部において近世の地表面下で確認した整地層である。IX a～IX cの3層に細分した。IX b層中には大型円礫の集中箇所があり、暗渠状遺構（KS-1134）とした。IX層中からは瓦片が出土したのみである。X層は、調査区東部で確認した近世の整地層でX a～X cの3層に細分した。IX層の上位に位置し、共に造酒屋敷地北辺部の整地あるいは造成に関わる土層の可能性がある。遺物は瓦片が出土した。

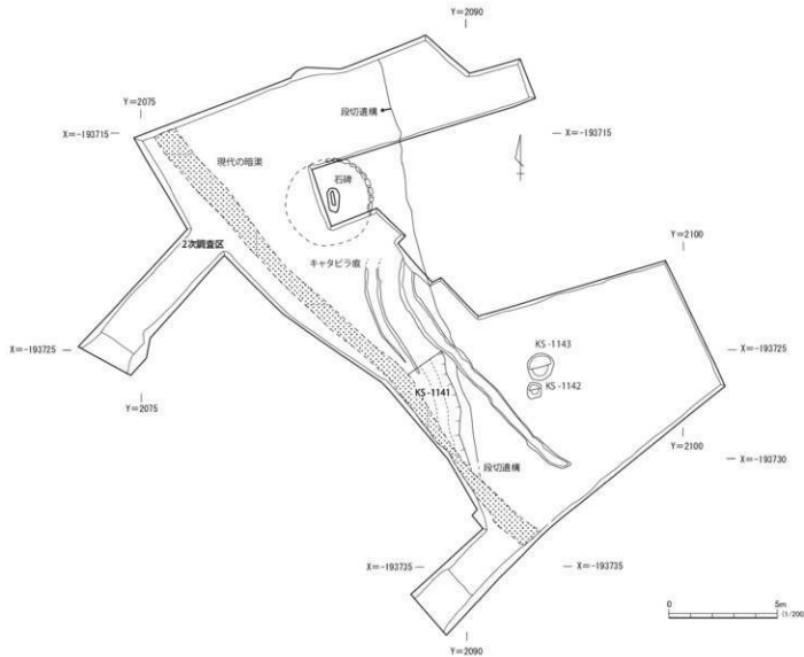


第6図 2区断面模式図

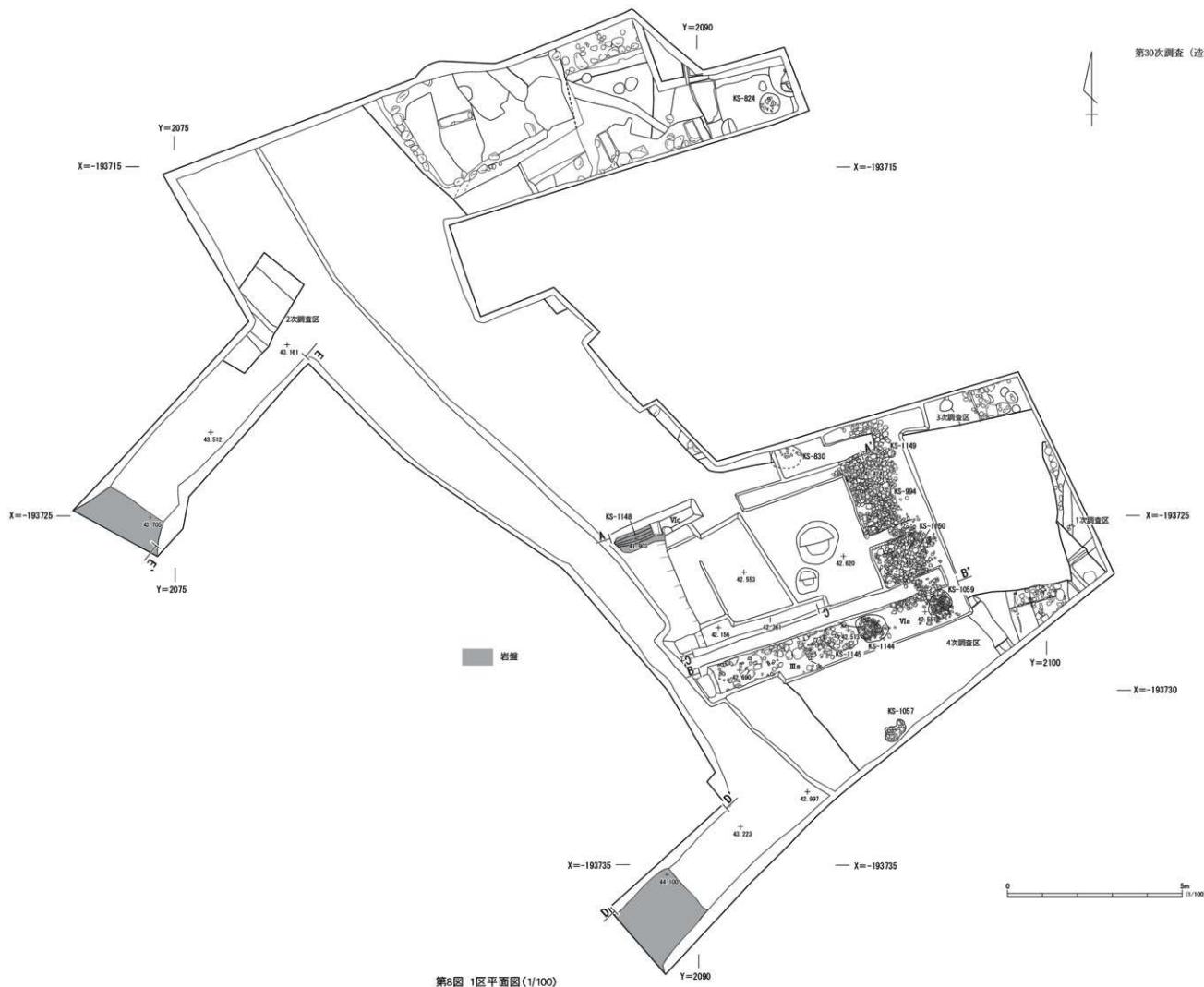
3. 1 区の検出遺構と遺物

(1) 近・現代の遺構と遺物

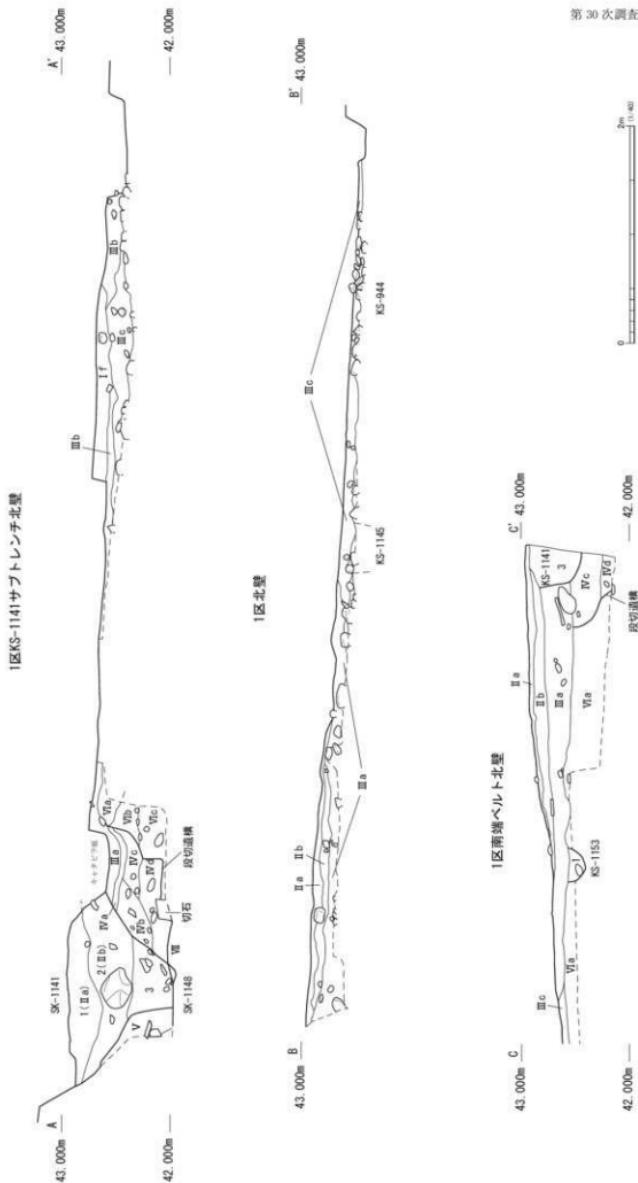
暗渠1条、段切遺構、溝跡1条、ピット2基、キャタピラ痕2条1対を確認した。暗渠は現表土の直下で確認した。帶状に確認された碎石の幅は、60～100cmである。造酒屋敷地の周縁部に設置され、敷地の北側と南側では東に折れ、現道路脇の側溝に繋がる。段切遺構は第2・3次調査（H21・22）区からの延長線上で確認した。確認した段の深さは、50cmないし30cmで南側でより浅くなっている。KS-1141は調査区の南西部で確認した、基本層II層により埋められた溝跡である。確認した延長は5.5mで、段切遺構のラインに平行する。規模は、上端幅1.6m以上、下端幅40cm、深さ38～96cmである。KS-1142・1143は調査区南部で確認したピットである。IIIa層堆積時に埋没したものと考えられる。調査区中央部から南部のIIa層上面で、併行する溝状の痕跡を2条確認した。重機のキャタピラ痕と推定される。延長約13m分を確認した。痕跡全体の幅は2～2.3mである。IIa層からはプラスチック製玩具が出土しており、概ね第二次大戦後にこの場所で使用された重機の痕跡と推定される。遺物は、Ia層から出土した骨格と手書きによる染付皿（写真図版5-5）と、IIb層から出土したガラス瓶（写真図版6-57）を掲載した。



第7図 近・現代遺構平面図

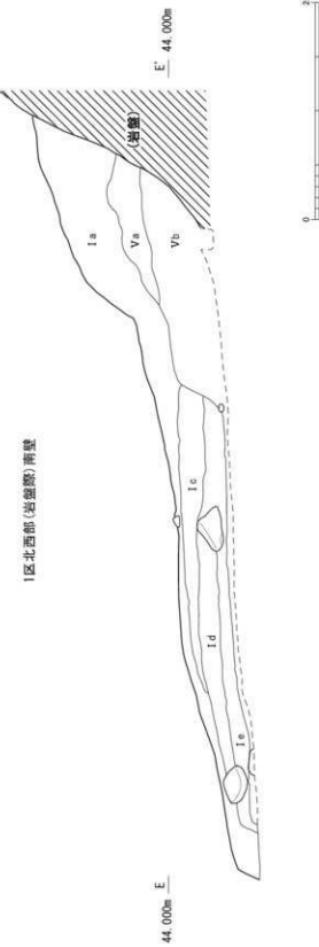
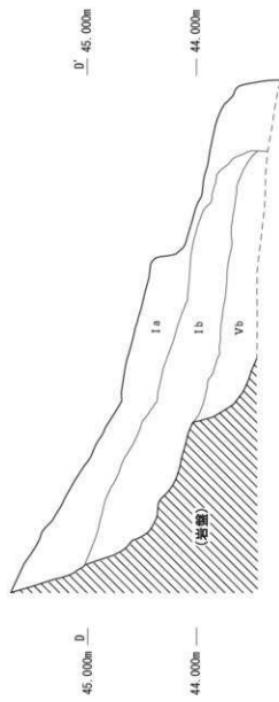


第8図 1区平面図(1/100)

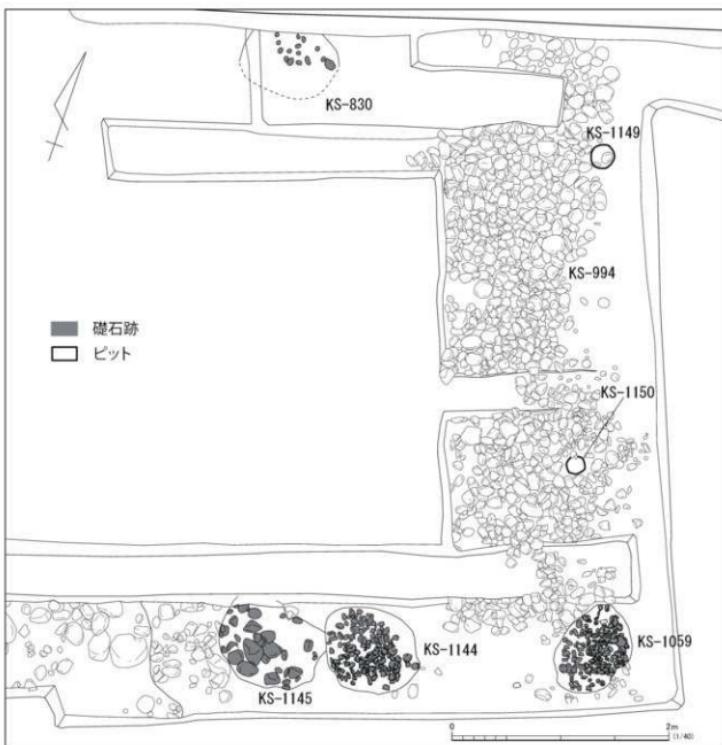


第9図 1区断面図(1) (1/40)

I区南西部(岩盤隙)北壁



第10図 I区断面図(2)(1/40)



第11図 2号礎石建物跡・KS-994 平面図

(2) 柱跡

2号礎石建物の柱跡について記述する。確認面は全てVIa層上面である。裁ち割りは、いずれも行っていない。

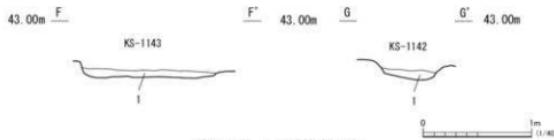
KS-1059 磂石跡

第4次調査(H28)で部分的に確認されていた遺構である。今回の調査で2号礎石建物跡の南東角の柱跡であることを確認した。礎石は検出されず根固め石のみ確認した。重複関係はKS-994より新しい。掘り方の平面形は不整橢円形である。掘り方の規模は、長軸87cm、短軸51cmである。根固め石には径5～15cmの円礎を利用している。

遺物は、第4次調査において掘り方上面から18世紀代の大堀相馬産灰釉碗が出土している。

KS-1144 磂石跡

KS-1059 磂石跡の西側で確認した。両礎石跡の柱間寸法は、中心間で約2mである。2号礎石建物跡の南辺に位置する柱跡である。礎石は検出されず根固め石のみ確認した。重複関係はKS-1145より新しい。掘り方の平面形は不整円形である。掘り方の規模は、長軸90cm、短軸76cmである。根固め石には径5～15cmの円礎を利用している。



第12図 1区遺構断面図

第3表 1区土層注記表

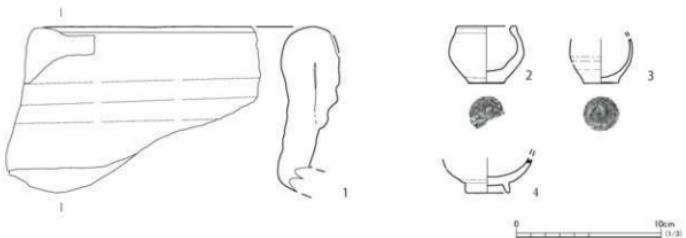
遺構・層位	土色		土質	土性 しまり	備考
	土色No.	土色			
近・現代の堆積土	I a	10YR1/4	暗褐色	砂質シルト	弱 現表土
	I b	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	弱 表土
	I c	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	やや弱 粉砕された礫岩(炭ガラ)を極多量に含む
	I d	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	やや弱 径1~5mmの砂礫を一部互層状に多量含む
	I e	10YR7/2	にじみ黄褐色	砂質シルト	やや弱 崩落土
	I f	10YR4/1	褐色	砂質シルト	やや弱 破砕された礫岩(炭ガラ)を斑状に含む I c層に接続した土層か
KS-1141を埋めた近代の整地層	II a	10YR8/4	浅黃褐色	シルト質粘土	強 細砂を一部含む 矿灰岩粒を多量含む 上面にキャビティ痕あり
	II b	10YR5/4	にじみ黄褐色	シルト質粘土	強 矿灰岩粒を多量含む
	II c	10YR5/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	強 黒褐色土を径5~10cmのブロック状にやや多く含む
近世遺構上面上の堆積土	III a	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	やや弱 旧表土 部分的に黄褐色土を粒状に含む 径3~5cmの円礫を少量含む
	III b	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや強 砂褐色土を粒状に少量含む
	III c	10YR5/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	やや強 砂褐色土をブロック状にやや多く含む
近代設切り遺構を埋めた土層	IV a	10YR7/4	にじみ黄褐色	シルト質砂	強 径1~3cmの礫岩をやや多く含む
	IV b	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	強 明黄褐色粘土を径1~5cmのブロック状にやや多く含む 径2~10cmの円礫を多量含む
	IV c	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	強 径3~10cmの円礫を少量含む
	IV d	10YR7/4	にじみ黄褐色	粘土	強 砂褐色土をブロック状に少量含む
近代の崩落土	V a	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質砂	弱 喀斯特土をブロック状にやや多く含む 径1~2cmの円礫を少量含む(崖からの崩落土)
	V b	10YR6/4	にじみ黄褐色	シルト質砂	やや弱 径1~10cmの円礫をやや多く含む(崖からの崩落土)
近世の整地層	VI a	10YR5/3	にじみ黄褐色	シルト質砂	強 路面多く含む 矿灰岩粒をやや多く含む
	VI b	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	強 矿灰岩粒を少量含む
	VI c	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	強 矿灰岩粒を少量含む
KS-1141	1	10YR7/6	明黄褐色	粘土	強 明黄褐色土を多量含む 径5~20cmの円礫・瓦片を多量含む
	2	10YR4/3	にじみ黄褐色	シルト質粘土	強 II b層に対応 径5~15cmの円礫・瓦片をやや多く含む 径30cmの大型礫を含む
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質砂	やや強 径1~15cmの矿灰岩を多量含む 径5~20cmの円礫・瓦片を少量含む 上面に植生跡多量有る
KS-1142	1	10YR1/2	黒褐色	砂質シルト	やや弱 砂質土はIII a層と同じ
KS-1143	1	10YR3/3	黒褐色	砂質シルト	やや弱 堆積土はIII a層と同じ
KS-1153	1	10YR4/1	褐色	砂質シルト	やや弱

遺物は、掘り方から陶器と瓦が1点ずつ出土した。この内、18世紀後半～19世紀前半の大堀相馬産白濁釉小坯を掲載した(写真図版5-12)。

KS-1145 磐石跡

KS-1144の西側に重複して検出した。2号礎石建物跡の南辺上にあたるが、KS-1144より古い磐石跡である。掘り方の平面形は不整梢円形である。掘り方の規模は、長軸98cm、短軸73cmである。根固め石には径10~20cmの円礫を利用しており、KS-1059・1144と比較すると、より大型の石材を選択している。

遺物は、掘り方から18世紀後半～19世紀前半の大堀相馬産白濁釉小坯が出土した(写真図版5-9)。この事からKS-1145 磐石跡の時期は、18世紀後半～19世紀前半と考えられる。



図中番号	遺物番号	種別	種類	副位・遺道	生産地	器種	製作年代	法量 (mm)	縞業・文様等	備考	写真図版	
1	I-235	陶器	吉兆	偏前	大坂	大鉢	17c 代	口径 (-) 底径 (-) 器高 (114)		5-7		
2	I-338	陶器	II a	大坂相馬	豆甕	19c 前半	口径 (42) 底径 (25) 器高 39	白濁釉	回転糸切り	5-13		
3	I-237	陶器	KS-1134・1	大坂相馬	豆甕	19c 前半	口径 (-) 底径 24 器高 (31)	白濁釉	回転糸切り	5-6		
4	I-236	陶器	KS-IIH-807 a	大坂相馬	小鉢	18c 後半～19c 前半	口径 (-) 底径 30 器高 (24)	白濁釉		5-9		
写	J-249	磁器	青磁	I a	波佐見	八角鉢	17c	器高 (64)	矢羽根文	5-2		
写	J-252	磁器	染付	I a	地方	皿	19c ～ 20c	口径 (126) 底径 (74) 器高 25	草花文	すり鉢 手書き	5-5	
写	I-347	陶器	II a	志野	向付	16c ～ 17c 初				5-27		
写	I-352	陶器	II b	不明	不明	中後～近世	厚さ 15			5-26		
写	I-348	陶器	III a	在地	大鉢	18c ～ 19c 前半				5-25		
写	I-358	陶器	III a	偏前	甕	17c 代	器高 (74) 厚さ 11			5-19		
写	I-353	陶器	VI a 上面	不明	不明	中後～近世	厚さ 15			5-16		
写	I-351	陶器	VI a	志野	皿	17c 前半	器高 (24)		折り線	5-23		
写	I-357	陶器	VI a	肥前	皿	17c 後半			肥前窯印付	5-18		
写	I-345	陶器	VI c	瀬戸美濃	開型香炉	17c 代	器高 (37) 厚さ 8		鉄輪	5-24		
写	I-350	陶器	KS-IIH-809 a	瀬戸?	灯明皿	18c か?	器高 22			5-20		
写	D-89	堆積土	KS-IIH-809 b	士跡		(23) × (19)				5-31		
写	I-346	陶器	KS-IIH-807 a	大坂相馬	小鉢	18c 後半～19c 前半	底径 (24) 器高 (24)	白濁釉		5-12		
写	I-344	陶器	KS-1148・1	埴	(二重?)	19c 前半	底径 (26) 器高 (14)	白濁釉	底面にも蓋板	5-22		

第13図 第30次調査出土遺物(1)1区

KS-830 磁石跡

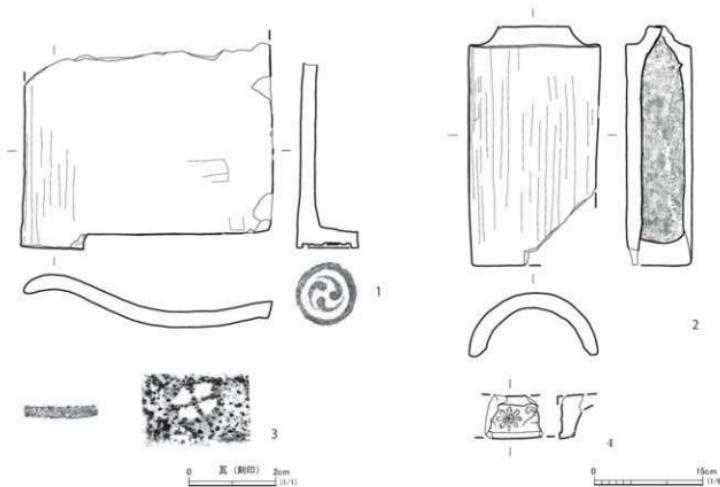
第3次調査において確認されていた磁石跡で、2号磁石建物内部の柱跡とされている。推定される2号磁石建物跡東辺ラインから西へ約3mに位置する。今回の調査区と重複していることから、改めて検出したが、全体の形状を確認することはできなかった。平面形は不明である。規模は長軸90cm、短軸52cm以上である。磁石は検出されず根拠のみ確認した。

KS-1150 ピット

2号磁石建物南東角の柱にあたるKS-1059の北約1.7mの位置で確認した。推定される2号磁石建物跡東辺ラインから西へ30cm程ずれる。しかし第3次調査(H22)において、2号磁石建物跡では磁石跡とピットが1間(1.9m)置きに配置されていることが確認されているため、現状では2号磁石建物跡に伴う柱穴の可能性を考えておきたい。重複関係はKS-994より新しい。平面形は円形で、規模は径16cmである。堆積土は黒褐色の砂質シルトである。遺物は出土していない。

KS-1149 ピット

2号磁石建物跡の東辺に位置するピットである。本遺構は柱間寸法上の妥当な位置からずれているため、2号磁石建物跡に伴う柱跡であるか否かは今後検討を要する。KS-994の東端部に位置するが、その重複関係は不明である。平面形は円形で、規模は径23cmである。堆積土は黒褐色の砂質シルトである。遺物は出土していない。



図中番号	登録番号	種別	種類	層位・遺構	法量 (mm)	重量 (g)	備考	写真図版
1	F-438	瓦	軒桟瓦(三巴文)	I a	前幅348 後幅(-) 長さ(275) 厚さ22 瓦当径85 内区幅66 内区幅9 周縁深さ5 瓦当厚22	3420		6-33
2	F-435	瓦	丸瓦	I a	前幅(75) 後幅186 長さ330 高さ88 厚さ21 玉縁 先幅(10) 玉縁長さ25	2480		6-38
3	F-448	瓦	平瓦	II a	長さ(66) 幅(104) 厚さ18 瓦当幅(80) 瓦当高さ(60) 瓦当厚(20) 内区幅(66) 内区高さ(26) 周縁深さ3.5	160	十字の刻印あり	6-36
4	F-437	瓦	軒平瓦(菊花文)	KS-1141・堆積土		136		6-35

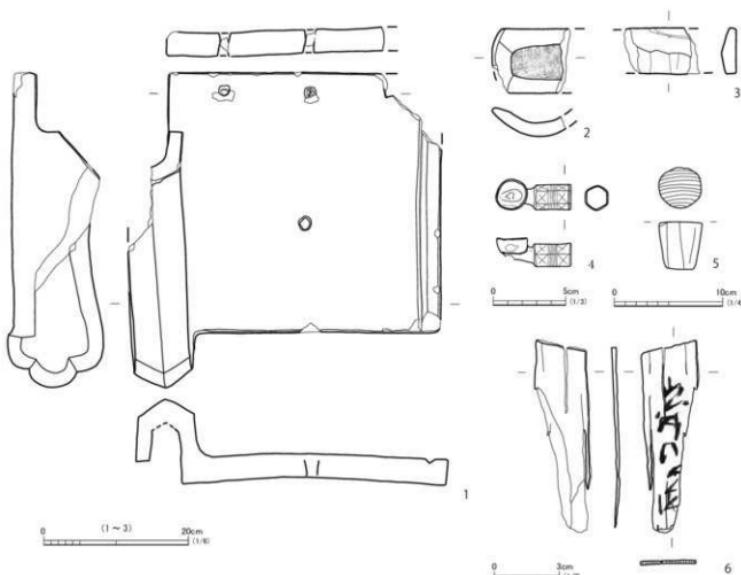
第14図 第30次調査出土遺物(2) 1区

(3) 集石遺構

KS-994 集石遺構

第3・4次調査において確認されていた遺構である。今回の調査では、その範囲と全体の規模が明らかとなった。集石の範囲は南北方向に延び、2号礎石建物跡の東辺に平行する。軸線の方向は、N-19° -Wである。重複関係は、KS-1150-1059 より古い。掘り方は、今回確認できなかった。5~15cmのやや偏平な円礎を隙間無く敷きつめており、明確なものではないが上面はやや平坦な状態となっている。2号礎石建物廃絶後のIII b・III c層堆積時に一部搅乱を受けている可能性も考えられる。集石の範囲は、南北6.9m、東西1.9mである。

2号礎石建物跡との関係については、その範囲が概ねその内部に収まることから、同建物跡に伴う何らかの施設である可能性が考えられる。なお、その廃絶においても、礎石跡と同様にIII b、III c層によってほぼ同時に埋没している。遺物は出土していない。



図中番号	登録番号	種別	種類	層位・遺構	法量 (mm)	重量 (g)	備考	写真図版
1	F-435	瓦	駒付平板	表探	全体 (全長 5436 幅 434) 平板部 (長さ 369 幅 379 厚さ 34 駒部 (長さ 352 幅 (-) 高さ 89)	9300	駒穴 4ヶ所 水切りあり	6-32
2	F-449	瓦	面戸	II a	長さ 89 幅 (102) 厚さ 19 高さ 40	200		6-44
3	F-439	瓦	面戸	II b	長さ 63 幅 (105) 厚さ 19 高さ (31)	115		6-43
4	N-1197	金製製品	堆積	KS-1143・1	全长 34 幅直径 14	4.74		6-48
5	L-166	木製品	栓	KS-1141・堆積上	長さ (44) 最大幅 40 最小幅 26	43.03		6-55
6	L-167	木製品	木筋	KS-1148・1	長さ (86) 幅 27 厚さ 1		樹種はヒノキ	6-51
7	L-168	木製品	薄板	KS-1146・1	全長 (266) 幅 25	10		6-53
8	X-11	ガラス	瓶	II b	高さ (191) 底径 48	233.3		6-57

第15図 第30次調査出土遺物(3)1区

(4) 溝跡

KS-1153 溝跡

段切遺構の底面で確認した。岩盤を掘り込んだ小規模の溝である。方向はN-19°-Wである。重複関係はKS-1141より古い。規模は、上端幅 26cm、下端幅 5~9cm、深さ 8cm である。

遺物は、陶器1点、瓦1点、木製品2点が出土した。掲載した陶器は19世紀前半の堤産鉛釉ミニチュア土器(蓋?)である(写真図版5-22)。木製品は、墨書きされた木箇を図示した(第15図6)。3~5文字の墨書きがみられるが、解読可能な文字ではなく、内容は不明である。また、厚さ1mmの柾目の板材を掲載した(写真図版6-53)。

KS-1153 溝跡

調査区南部のサブトレンチ内において、VI a層上面で確認した。2号礎石建物跡内部に位置するが、同建物跡との時間的前後関係は不明である。

4. 2区の検出遺構と遺物

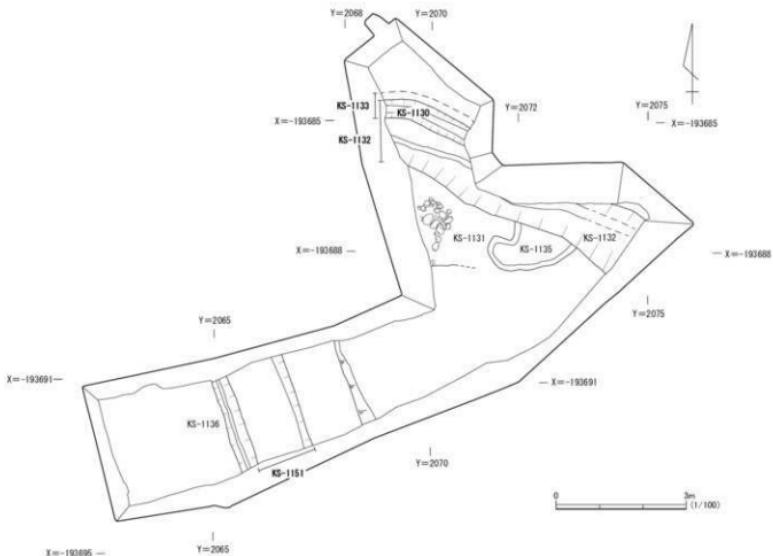
(1) 近・現代の遺構と遺物

溝跡5条、暗渠1条、土坑3基を確認した。北部から東部において、同一方向に延びる溝跡を3条確認した(KS-1130・1132・1133)。方向は、N-64°-Wである。これらの延長方向は、調査区の東を通る市道の方向とほぼ平行する。この道路は、明治30年代に本丸(招魂社)へ向かう参拝道として整備されたのが始まりである。これらの溝跡は、その参拝道に沿って掘削された可能性が考えられる。このうち最も古い溝跡はKS-1132である。規模が最も大きく、上端幅1.8m以上、深さ68cmである。掘り込み面はIIa層上面とみられ、近世の地表面がII層の土砂によって覆われた後に掘削された溝である。堆積土は全て水性堆積土で、沢の上流部から流れる土砂を処理するための施設であったと推定される。遺物は、掲載した用途不明の木製品(第17図4)と中国産青花皿(写真図版5-3)の他、ガラス瓶、ビニール片が出土した。KS-1133はKS-1132が埋没した後に、同箇所で掘削された溝跡である。掘り込み面はIIa層上面である。なお、IIa層上面には部分的に層厚2~3mの黒褐色土(旧表土)が残存しており、KS-1133はこれを掘り込んでいる。規模は、上端幅73cm、深さ38cmである。遺物はビニール片が出土した。

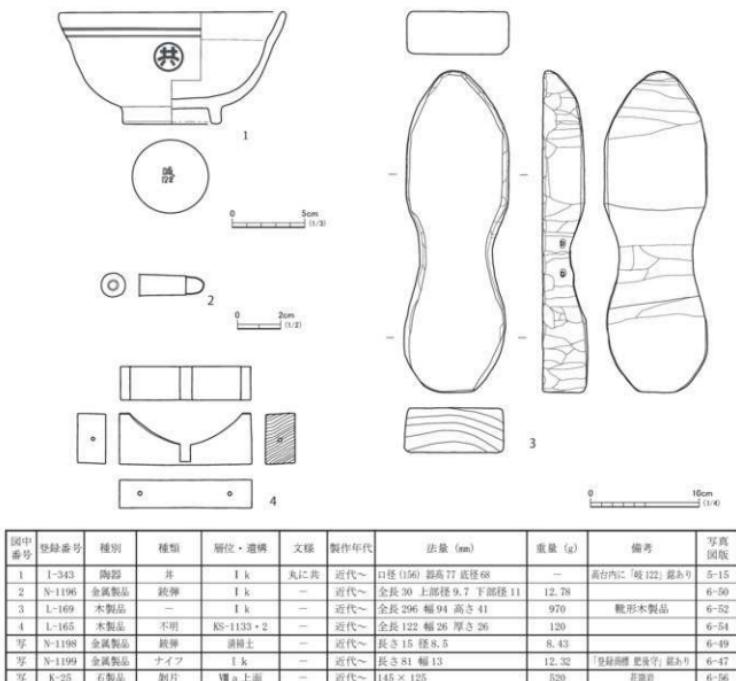
KS-1136・1151は西部で確認した南北方向に延びる溝跡である。近代以降の遺物は出土していないが、現代の旧表土であるIi層直下から掘り込まれていることから、近代以降の溝跡と考えられる。

KS-1131は、KS-1132より古い暗渠である。今回の調査区と重複する第2次調査(2区)では擾乱とされていたが、今回その延長部分を確認し、近代以降の暗渠であると判断した。堆積土2層中に径15~30cmの河原石が集積している。遺物は、花崗岩の剥片18点、ガラス片2点のほか瓦2点(写真図版6-40・46)が出土した。

KS-1135はKS-1131の底面で確認した土坑で、掘り込み面は不明である。北東側でKS-1132と重複しているため全形体形状は不明であるが、平面形は不整形を呈する。規模は、長軸2m以上、短軸1.1m以上、深さ20cmである。遺物は、



第16図 近・現代遺構平面図

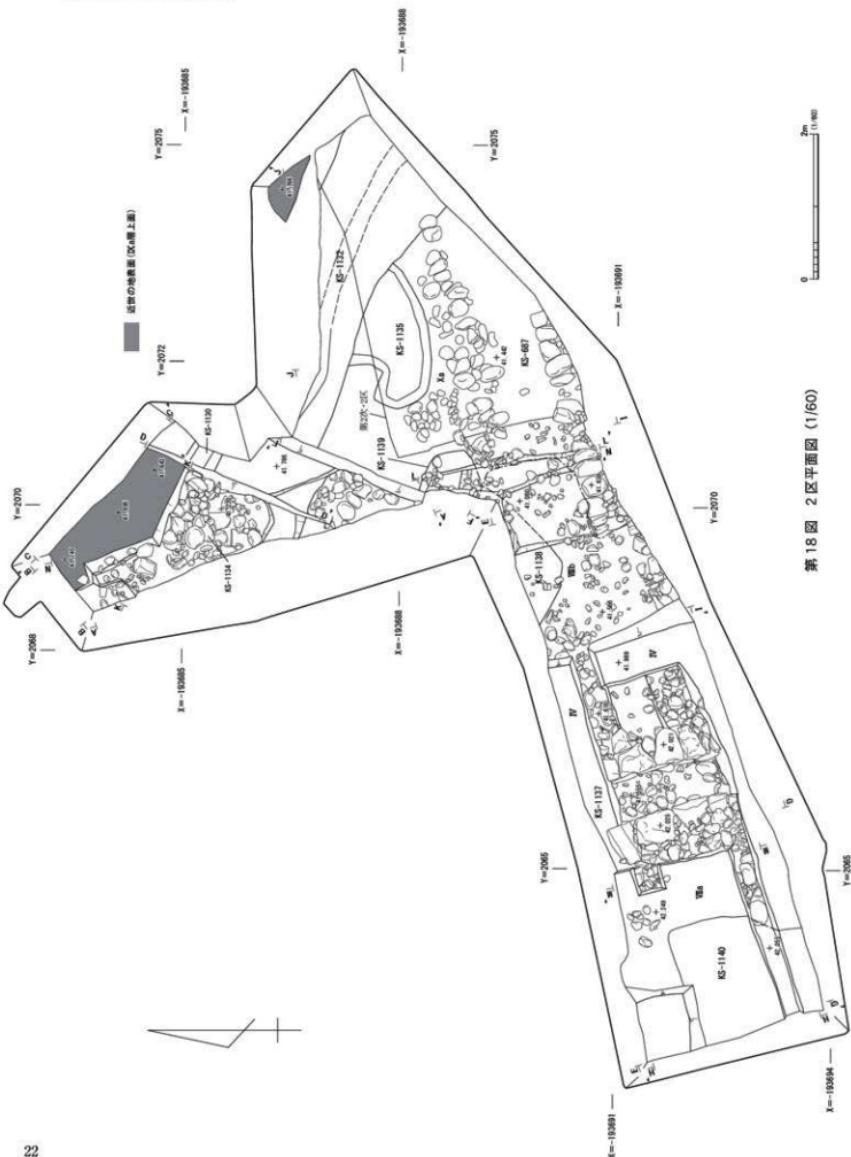


第17図 第30次調査出土遺物(4)2区

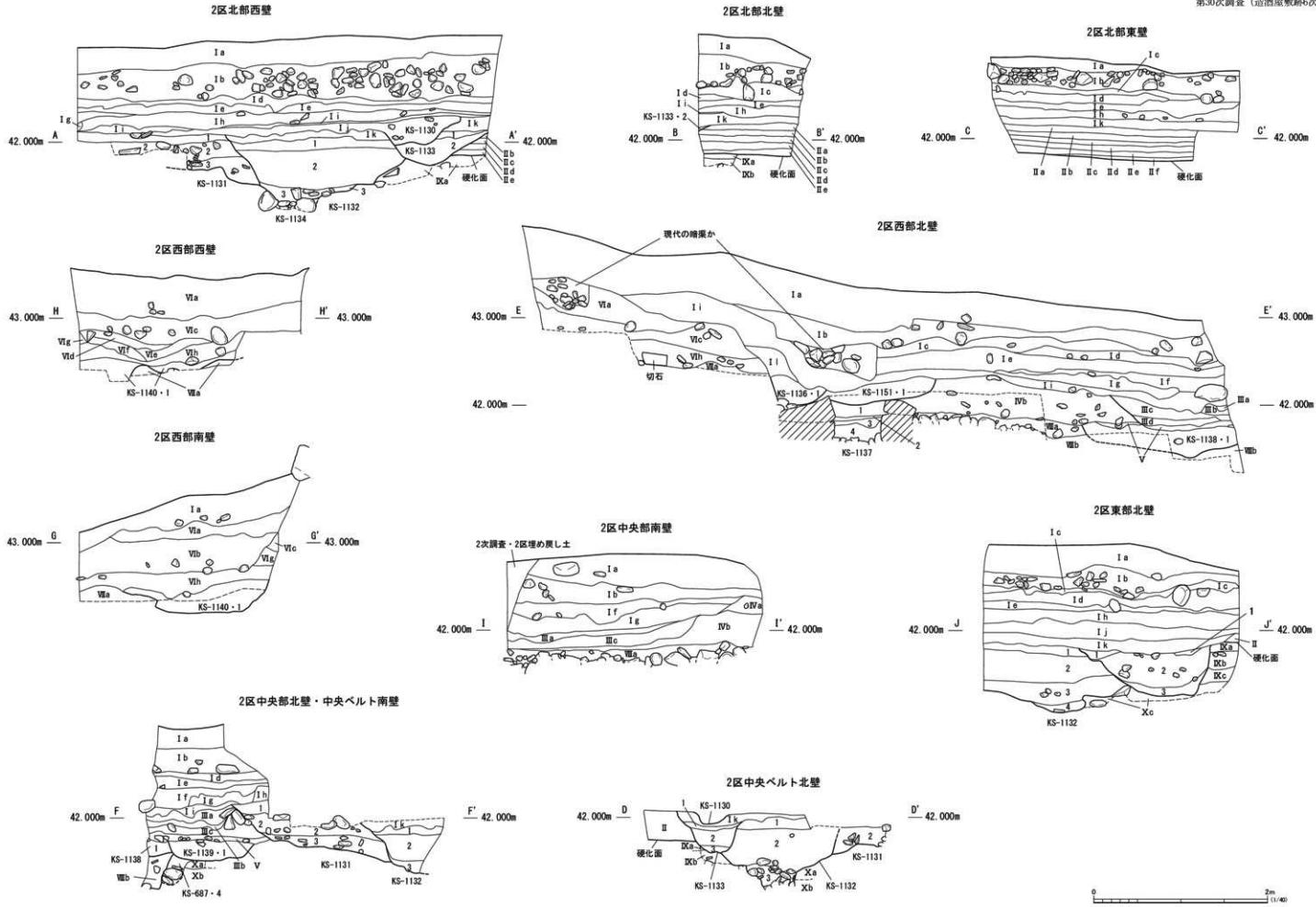
堆積土より花崗岩の剥片が出土した。

近・現代の出土遺物として、陶器1点、金属製品3点、木製品2点、花崗岩製剥片1点を掲載した。(第17図1)は、いわゆる「統制陶器」の井である。厚手で重量がある。外面には口縁部に2本の圓線がめぐり、丸に「共」の銘がある。また高台内には統制番号とみられる「岐 122」の銘がある。概ね第二次大戦時の生産品と考えられる。(第17図2)は銃弾である。全長30mmで最大径11mmで、重量12.78gである。その全長から明治26年以降、旧日本軍に採用されたいわゆる「26式拳銃」の銃弾とみられる。(写真図版6-47)は折りたたみ式のナイフである。刀身部は腐食し残存していない。鞘の片面にはプレスによって「商標登録 肥後守」の銘が陰刻されている。(第17図3)は全体形状が靴型を呈する木製品である。大きさは、全長29.6cm、幅9.4cm、厚さ4.1cmである。側面および底面には加工痕が顕著に観察されるが、加工の程度は粗く未成品である可能性も考えられる。くびれ部の両側面にはそれぞれ2つの孔がみられる。類似資料として仙台市歴史民俗資料館所蔵の「シュース」がある。これは靴型を呈した木製の台に革鞋をのせた履物で、昭和初期に旧陸軍歩兵第四連隊にて使用されたとされる(仙台市歴史民俗資料館2003)。(第17図4)は全体が丁寧に加工された木製品である。直方体の長辺部に半円形の凹みをもち、底面には幅1cm、深さ1.6cmの切り込みがみられ底面に2つ、両側面に1つずつ孔がみられる。用途不明だが、何らかの作業台あるいは型の可能性がある。

第30次調査（造酒屋敷跡 6次）



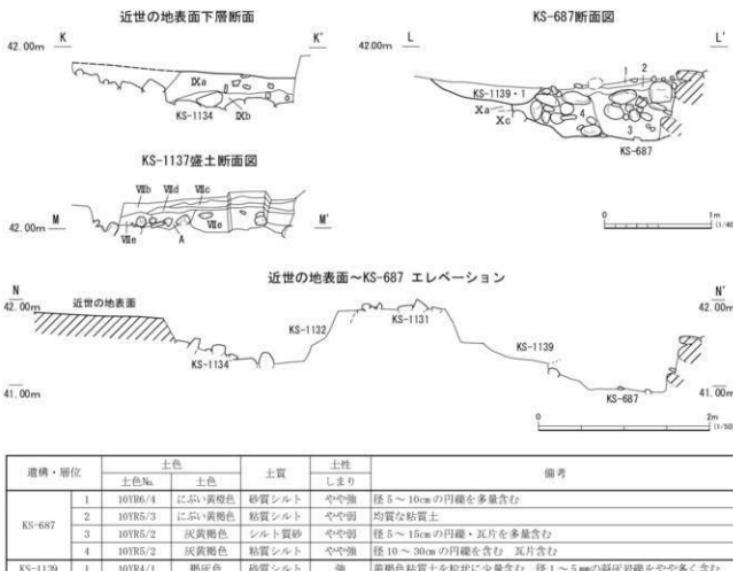
第18図 2区平面図 (1/60)



第19図 2区断面図 (1/40)

第4表 2区土層注記表

遺構・層位	土色		土質 しまり	備考
	土色No.	土色		
現代の堆積土	I a	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト 弱 規則土。径2~5cmの円錐を少量含む
	I b	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト 弱 径2~20cmの円錐を多量含む 円錐は宮城県沖埋置(ESS年)により崩落した浜水門石垣の礫石
	I c	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト 弱 上面は宮城県沖埋置時の地表面 径2~10cmの礫を少量含む
	I d	10YR4/2	灰黃褐色	シルト 弱 径1~3cmの礫・炭を少量含む
	I e	5Y3/1	オリーブ色	シルト やや強 径1~3cmの礫を少量含む
	I f	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト やや強 径1~3cmの礫を少量含む
	I g	7.5YR2/2	黒褐色	砂質シルト やや強 灰黃褐色粘土質を径2~5cmのブロック状に多量含む
	I h	10YR4/2	灰黃褐色	シルト質粘土 やや強
	I i	7.5YR2/2	黒褐色	砂質シルト やや強 KS-1131~1132埋後の旧表土
	I j	2.5Y4/2	暗灰褐色	シルト 弱 粘土を多量含む 径3~15cmの円錐・鉄分を少量含む KS-1130の堆積土
近世の地表面を覆う水性堆積土	I k	2.5Y5/1	眞褐色	シルト やや強 水性堆積土。一部細砂を互層状に含む 鉄分を少量含む
	I l	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト やや弱 IV番の崩落土
	II a	10YR3/3	にぶい黄褐色	細砂 強 水性堆積土。下部に粗砂を含む
	II b	10YR3/3	にぶい黄褐色	細砂 強 水性堆積土。下部に粗砂を含む
	II c	10YR6/3	にぶい黄褐色	細砂 強 水性堆積土。下部に粗砂を含む
	II d	10YR6/3	にぶい黄褐色	細砂 強 水性堆積土。下部に粗砂を含む
	II e	10YR6/3	にぶい黄褐色	細砂 強 水性堆積土。下部に粗砂を含む ガラス片出土
	II f	10YR6/3	にぶい黄褐色	細砂 強 水性堆積土。下部に粗砂を含む ガラス片出土
	II g	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂質シルト やや強 径1~5mmの灰岩粒をやや多く含む
	II h	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト やや強 径1~5mmの灰岩粒をやや多く含む
近代以降の堆積土	III c	7.5YR3/1	黒褐色	砂質シルト やや弱 植物遺存体を少量含む
	III d	10YR4/1	褐色	砂質シルト やや弱 一部互層状に粗砂を含む
	IV a	10YR4/4	にぶい黄褐色	砂質シルト やや強 径1~5mmの灰岩粒を多量、径3~10cmの円錐を少量含む
	IV b	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト やや強 径1~5cmの灰岩粒を多量含む
	IV c	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト 強 径5~15cmの円錐をやや多く含む
	IV d	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト 弱 底物をやや多く含む
	IV e	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト 弱
	IV f	10YR7/3	にぶい黄褐色	砂質シルト 弱 径1~5mmの灰岩粒を多量含む
	IV g	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径1~3mmの灰岩粒を多量含む
	IV h	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト 強 径3~5cmの灰岩粒を含む。陶器片出土
KS-1137石組護路西側の上部堆土	V a	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 断面図にはわからない。V bからV aでも可
	V b	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径1~5mmの灰岩粒を少量含む
	V c	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径1~5mmの灰岩粒を少量含む
	V d	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト やや強 径1~5mmの灰岩粒を少量含む
	V e	10YR2/2	灰黃褐色	砂質シルト 強 径1~5mmの灰岩粒を少量含む
	V f	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト 強 径1~5mmの灰岩粒を少量含む
	V g	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径1~3mmの灰岩粒を多量含む
	V h	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径1~5mmの灰岩粒を少量含む
	V i	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む。V層における施設(埋蔵?)の可能性あり
	V j	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
KS-1137石組護路西側の下部堆土	VI a	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI b	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI c	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI d	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト やや強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI e	10YR2/2	灰黃褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI f	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI g	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI h	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI i	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
	VI j	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト 強 径5~10mmの灰岩粒を多量含む
KS-1137石組護路東側の上部	VII a	7.5YR3/1	黒褐色	粘質シルト やや強 表土か。径1~3cmの円錐・瓦片を少量含む
	VII b	7.5YR3/1	黒褐色	粘質シルト やや強 上面から花崗岩片(木桶石)出土
	VII c	7.5YR4/1	褐色	シルト質砂 やや強 径10~30mmの円錐を多量含む
	VII d	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト やや強 上面が固く締まる。下平面に径5~10cmの円錐・瓦片をやや多く含む
	VII e	10YR3/2	灰黃褐色	粘質シルト 強 分別的に径10~30cmの円錐を多量含む KS-1134凝灰岩遺構
	VII f	10YR5/1	褐色	粘質シルト 強
	VII g	10YR5/6	明黄褐色	細砂 強 径5~15mmの円錐を部分的にやや多く含む
	VII h	10YR5/6	明黄褐色	シルト質粘土 強 黒褐色土を径5~15cmのブロック状にやや多く含む 瓦片含む
	VII i	10YR4/2	灰黃褐色	シルト質粘土 強 粘質土を径3~5cmのブロック状に少量含む 径5~10cmの円錐を少量含む
	VII j	10YR4/2	灰黃褐色	粘質シルト 強 基本層II 1層に同じ
KS-1137石組護路の上部	VI I	2.5Y4/2	暗灰褐色	シルト質シルト 弱 径1~5cmの礫を少量含む
	VI J	10YR5/2	灰黃褐色	砂質シルト 弱 径5~10cmの円錐を多量含む 花崗岩の剥片を含む
	VI K	10YR5/1	褐色	砂質シルト 弱 径5~10cmの円錐を多量含む 花崗岩の剥片を含む
	VI L	2.5Y5/1	眞褐色	シルト 弱 水性堆積土。一部細砂を互層状に含む
	VI M	2.5Y5/1	眞褐色	砂質シルト 弱 水性堆積土。一部細砂を互層状に含む
	VI N	2.5Y4/1	眞褐色	シルト 弱 水性堆積土。一部細砂を互層状に含む
	VI O	2.5Y4/1	眞褐色	シルト 弱 黄褐色粘土をブロック状にやや多く含む 径1~5cmの円錐をやや多く含む
	VI P	10YR4/1	褐色	粘質シルト 弱 黄褐色粘土をブロック状にやや多く含む 径1~5cmの円錐を下部に含む
	VI Q	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト 強 径1~3cmの礫を少量含む 灰化物を粒状にやや多く含む
	VI R	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト 強 径1~3cmの礫を少量含む 灰化物を粒状にやや多く含む



第20図 2区遺構断面図

(2) 近世の地表面

北部および東部のII層直下、IXa層上面で堅く締まった面（硬化面）を確認した。IX層は、X層と共に2区の基盤をなす近世の整地層である。IX層の時期は、詳細は不明だがガラス等の混入がないことから近世期と判断した。この面の標高は、調査区北端では北から41.745m、41.643mと南へ緩い傾斜を示すが、調査区東部では41.786mとやや高い。

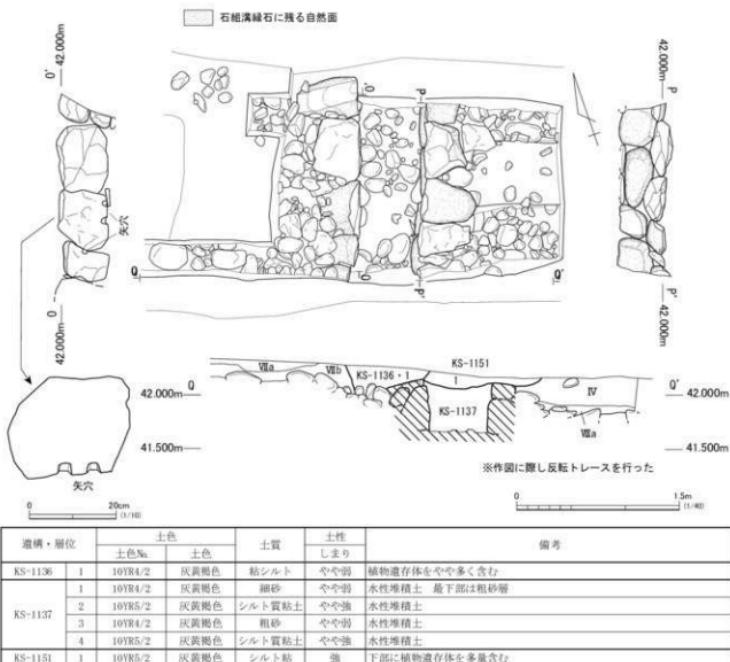
IX・X層からは共に瓦片が出土しており、この一帯は、ある段階に再度整地された可能性がある。また、地表面の露出時期は、直上のII層から板ガラス片が出土していることから、近世から近代のある時期までと考えられる。この地表面は、周辺遺構との位置関係や絵図等との比較から、造酒屋敷地の北側を通る登城路の路面である可能性が高い。

(3) KS-1134 暗渠状遺構

北部におけるKS-1132構跡底面のIXb層中で、径10~30cmの円礫の集中部を確認した。明確な掘り方はない。その性格については、円礫の集中部が南北1.4mの範囲に限定し東西方向に延長すると推定されることから、現時点では暗渠の可能性が考えられる。

(4) KS-1137 石組溝跡

西部で確認した南北に延びる石組の溝跡である。重複関係はKS-1136・1151より古い。規模は、石組内部で上端幅65cm、下端幅54cm、深さ45cmである。確認長は1.9mで、方向はN-18° ~Wである。明確な掘り方は確認できないが、西側縁石の西側で幅1.7mの範囲に大型の円礫が集積しており、これが裏込めとなる可能性がある。また、その直上の盛土（VIIb層）も西側縁石の構築と一連のものと考えられる。東側縁石の東側でも掘り方は確認できず、KS-687石組遺構を掘り込んだ範囲まで円礫を多量に含む土層（VIIb層）の分布を確認した。VIIb層は、東側縁石の構築とはほぼ同時期に堆積した可能性が考えられる。



第21図 KS-1137 石組溝跡・断面図

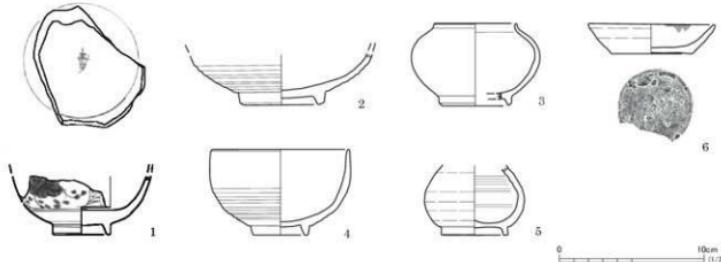
縁石は、東西の縁石で利用石材の加工の度合いや、石材の大きさ、積み方に違いがある。西側縁石は原則1段で主に大型の石材を利用し、2石に3つの矢穴がみられる。西側縁石の天端面は、一部を除き縁石の尻に向かって傾斜する傾向がある。一方、東側縁石は2段積みで、自然縫の端部を打ち欠いた石材ないし未加工の自然縫を多く利用している。天端面は概ね平坦である。両縁石の特徴の違いは、それぞれの背後に異なる堆積土と共に時期差を示す可能性がある。その場合、西側の縁石等が先に構築された可能性が高い。本溝跡の底面には径15~25cmの円礫があり、意図的に敷いたものと考えられる。堆積土は4層に細分した。いずれも自然堆積土である。

遺物は、陶器1点、土師質土器1点、瓦20点、石製品1点、木製品3点が出土した。そのうち、底面近くから出土した17世紀後半から18世紀前半の肥前産陶器鉢を掲載した(写真図版5-28)。遺構の時期は、VIIa層から出土した小野相馬産瓦(写真図版5-17)およびVIIb層直上のVIIh層から出土した瀬戸美濃産染付碗の年代から、18世紀後半から19世紀前半に属すると推定される。

(5) KS-687 石組遺構

中央部において東西に延びる石組遺構を確認した。第2次調査では2列の石組みをもつ石組溝として報告されたが、断面に自然堆積土が見られることから、溝との評価を一時保留し、本報告では石組遺構として記載する。なお今回の調査範囲は、一部平成21年の第2次調査区(2区)と重複する。確認長は3.2mで、方向はN-72°-Eである。

本遺構は、自然縫を利用した南北2列の石列により構成される。南側の石列は、やや平坦な小口面をそろえて比較



中国 番号	登録番号	種別	種類	層位・遺構	生産地	器種	製作年代	法量 (mm)	軸裏・文様等	備考	写真 図版
1	J-248	磁器		I a ~ b	肥前	碗	19e 前半	口径 (-) 深高 (40) 底径 (40)	222・255c	5-1	
2	I-342	陶器		VI h	大堀相馬	碗	18c 代	口径 (-) 深高 (35) 底径 58	掛け分け	5-21	
3	I-339	陶器		VI h	大堀相馬	盆 小鉢	18c K ~ 19c 前半	口径 (58) 深高 57 底径 (50)	灰釉 口縁部内面彫刻	5-21	
4	I-341	陶器		VI h	大堀相馬	碗	18c	口径 (56) 深高 59 底径 (38)	掛け分け	5-8	
5	I-349	陶器		KS-1140 - I	大堀相馬	利	18c 前半 ~ 19c 前半	口径 (-) 深高 (48) 底径 (46)	白釉物	5-11	
6	D-88	土師質 土器		VI h		灯明皿	18c 5~9	口径 (88) 深高 21 底径 (56)	表面あり 回転切妻	5-30	
7	I-355	陶器		IV h	大堀相馬	小环	18c 前半 ~ 19c 前半	底径 (34) 器高 (20)	灰釉	5-14	
8	J-251	磁器	染付	I a ~ b	肥前	德利	19c 前半	器高 (60)	施釉文字彫(左) 素書きの細線	5-4	
9	J-250	磁器	青花	KS-1132 - 4	中国 中鉢	盆	18c K ~ 17c 前半		施文	明末～清初め 5-3	
10	I-356	陶器		KS-1137 - 4	肥前	跡	17c 前半 ~ 18c 前半		刷毛目文	5-28	
11	I-354	陶器		VII a	小野相馬	皿	18c 後半	口径 (132) 器高 (24)	淡青釉	見込み板の捺印 5-17	
12	Ig-28	瓦質土器		VI				全長 (83) 高さ (65)			5-29

第22図 第30次調査出土遺物(5)2区

的整然と配置されている。一方、北側の石列は各石材の平面的なばらつきが大きい。両石列間の幅は60~80cmである。掘り方は一部での確認にとどまり、溝状であると推定されるが、明確な平面プランは確認できなかった。断面観察による掘り方の規模は、上端幅150cm以上、下端幅100cm、深さ55cmである。石列の石材は、南側で3~4段積みとみられるが、北側では意図的に積まれた状況は観察できなかった。堆積土は、石列部にあたる掘り方の両脇ではやや締まりの強い粘質土で、その中間部では円碟や瓦片を多量に含む砂質土である。中間部では自然堆積土は観察されなかった。

本遺構の構築時期は、廃絶後にKS-1137石組溝が構築された可能性が高いことから、それ以前の遺構と考えられる。

(6) 土坑

KS-1138 土坑

中央部北側で確認した。掘り込み面はVII a層上面である。北側は調査区外に延びる。平面形は不明である。重複関係はKS-1139より古い。規模は東西210cm、南北60cm以上、深さ30cmである。堆積土は1層である。遺物は、陶器2点、土師質土器1点、瓦13点が出土地した。本遺構の時期は、VII a層で17世紀後半から18世紀代の肥前産陶器が出土していることから、それ以降と考えられる。

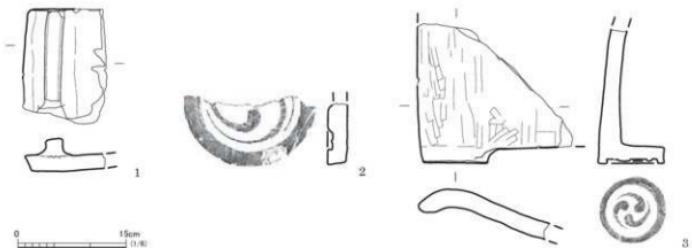
KS-1139 土坑

中央部北側で確認した。掘り込み面はVII a層上面である。西側は調査区外に延びる。平面形は橢円形である。重複関係は、KS-1138より新しい。規模は東西60cm以上、南北60cm、深さ23cmである。堆積土は1層である。遺物は、青磁1点が出土地した。本遺構の時期は、18世紀以降と考えられる。

(7) 性格不明遺構

K-1140 性格不明遺構

西部で確認した。掘り込み面はVII a層上面である。西側および南側は調査区外に延びる。平面形は不明である。規模は東西107cm以上、南北108cm以上、深さ35cm以上である。堆積土は1層である。遺物は、陶器6点、土師質土



図中番号	登録番号	種別	種類	層位・遺構	法量 (mm)	重量 (g)	備考	写真図版
1	F-442	瓦	飾瓦 (二の平)	I a ~ b	幅 (105) 長さ (150) 厚さ 45 突起部幅 24 突起部高さ 22	660	6-39	
2	F-440	瓦	軒丸 (三巴文)	VII b	瓦当径 (180) 内区径 (130) 周縁幅 21 瓦深さ 6 瓦厚さ 26	460	6-37	
3	F-441	瓦	軒丸 (三巴文)	I d 上面	前縁 (216) 後縁 (7) 長さ (170) 平部厚さ 25 瓦当径 92 内区径 70 周縁幅 93 周縁深さ 6 瓦厚さ 23	1260	6-34	
写	F-447	瓦	軒平 (花菱文)	VII	長さ (81) 瓦当幅 (78) 内区高 (30)	100	6-41	
写	F-445	瓦	軒丸 (珠文三巴文)	I k	瓦当径 (64) 内区径 (40)	50	6-45	
写	F-446	瓦	飾瓦	KS-1131・2 前 (95) 幅 (63) 厚さ 42		10	6-46	
写	F-443	瓦	軒丸 (珠文三巴・左)	KS-1131・2 内区 (40) 周縁幅 21 瓦当 (65)		210	6-40	
写	F-444	瓦	軒平 (花菱文)	VII b	長さ (73) 高 (36) 厚さ 20	60	6-42	

第23図 第30次調査出土遺物(6)2区

器1点、瓦質土器1点、瓦4点、木製品1点が出土した。この内18世紀後半から19世紀前半の大堀相馬産徳利(第22図5)を掲載した。本遺構の時期は、堆積土出土の大堀相馬産灰釉碗および直上のVI h層から出土した瀬戸美濃産染付碗から、18世紀後半から19世紀前半と考えられる。

5. 遺構外出土遺物

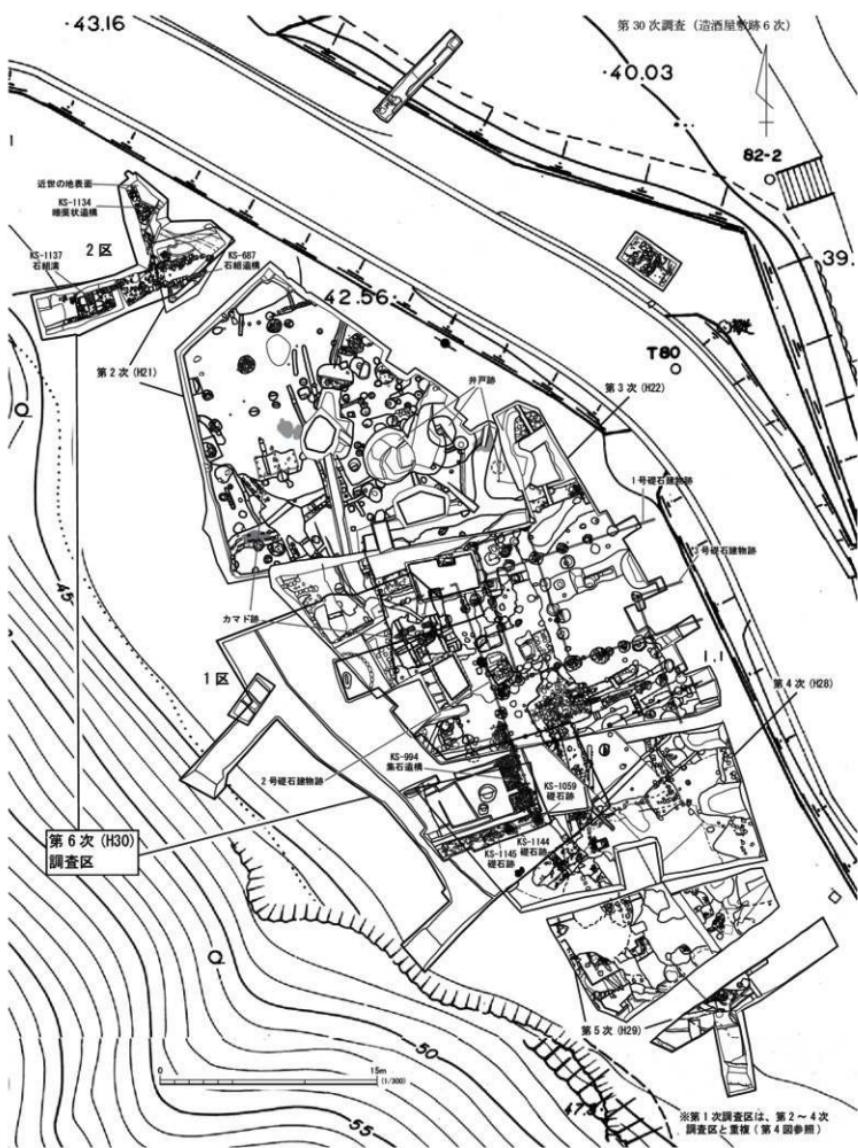
遺物の出土点数については第5表に示した。1区では、特に2号礎石建物跡の時期に關わる、VI h層(近世整地層)から17世紀前半から18世紀代までの陶器が出土した。主体は18世紀代の大堀相馬産陶器である。碗、瓶類がみられる。17世紀代の遺物としては、志野皿(写真図版5-23)、肥前座皿(写真図版5-18)、瀬戸美濃産筒型香炉(写真図版5-24)を掲載した。また、表様ながら17世紀代備前産陶器の大甕の口縁部破片が出土した(第13図1)。第3次(H22)調査出土の口縁部破片とは別個体とみられ、造酒屋敷内において備前産大甕が複数利用されていたことを示す資料である。その他特徴的なものとして、豆甕(第13図2・3)、小壺(第13図4)の小型の陶器を挙げることができる。これまで造酒屋敷地内では、それぞれ計8点、計27点の資料が出土している。两者とも造酒屋敷地外ではありませんとまつた出土例がなく、屋敷地内での何らかの作業等に關わる遺物とみられる。2区では、基本層VI h層から、18世紀を主体とし19世紀中葉までの比較的まとまった量の陶器が出土した。陶器には大堀相馬産碗・蓋付小甕(第22図2~4)、瀬戸美濃産瓶類、京・信楽産色絵碗等がみられる。

6.まとめ

1区では、2号礎石建物の南東角および南辺部にあたる礎石跡を2基確認した。これにより2号礎石建物跡の南辺と東辺の位置を特定することができた。建物跡の時期は、出土遺物から18世紀後半から19世紀前半と推定される。2区では、登城路の路面の可能性がある地表面を確認した。また屋敷地北辺部とみられる箇所でKS-687石組遺構を確認した。さらに、石組遺構廃絶後に南北方向に延びる石組構が構築され排水処理にかかわる整備の行われたことが明らかとなった。その時期は18世紀後半から19世紀前半頃と推定される。

第5表 第30次調査出土遺物集計表

区	遺物番号	種類	土器			土器質土器			陶器			金瓦製品			石製品			木製品			ガラス			植物遺体			その他			総計	
			I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	VIII	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII	XVIII											
	KS-1144	II	20	29	2	6	17	17	6	446	3	1	417	3	3	2	1	1	7	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	522	
	KS-1145	III	30	17	8	8				33	3																				465
	KS-1146	V								1																					4
	KS-1147	VI	2	19	1					18																				40	
	KS-1148	VII	7							2																				2	
1	KS-1149	I	7	1	1				1	34																			1	54	
	KS-1150	KS-1151	3	15	2				1	1																				11	
	KS-1152	KS-1153	1	1						1																				21	
	KS-1154	KS-1155	1	1						1																				2	
	KS-1156	KS-1157	1	16	2				1	1																			1	1	
	KS-1158	KS-1159	2	1	1				1	5																			4		
	KS-1160	KS-1161	1	1						2																			1		
	KS-1162	KS-1163	2	9	2				1	137																		1	144		
	KS-1164	KS-1165	1	1					1	107																		1	13		
	KS-1166	KS-1167	2	1	1				1	11																		1	2		
	KS-1168	KS-1169	2	1	1				1	2																		9	9		
	KS-1170	KS-1171	3	3	1				1	9																		5	5		
	KS-1172	KS-1173	2	9	2				1	137																		164			
	KS-1174	KS-1175	1	1					1	109																		1	166		
	KS-1176	KS-1177	2	1	1				1	1																		1	1		
	KS-1178	KS-1179	2	1	1				1	20																		27	27		
	KS-1180	KS-1181	1	1	1				1	13																		26	26		
	KS-1182	KS-1183	1	1	1				1	13																		16	16		
	KS-1184	KS-1185	1	1	1				1	1																		1	1		
	KS-1186	KS-1187	1	1	1				1	4																		8	8		
	KS-1188	KS-1189	12	12	12				1	78		1	1	1													1	1			
	KS-1190	KS-1191	60	77	15	0			4	767	6	32	45	25	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10			
	KS-1192	KS-1193	161	213	40	1			7	184	2	13	35	56	48	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10		
	総計																												2034		



第24図 造酒屋敷跡第1~6次調査全体図

写真図版 1 第 30 次調査(造酒屋敷跡 6 次) 1 区(1)



1. 造酒屋敷地全景（北から）



2. 北西部 南壁（北から）



3. 南西部北壁（南から）



4. 南部ベルト断面（北西から）



5. 段切遺構・近世整地層断面（南から）



6. 2号礎石建物跡南辺部ベルト断面（南西から）



7. KS-1141 溝跡断面（南から）



8. KS-1148 溝跡（南西から）

写真図版2 第30次調査(造酒屋敷跡6次) 1区(2)



9. KS-1143 ピット (南から)



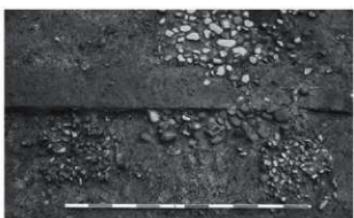
10. 2号礎石建物跡 (東から)



11. 2号礎石建物跡の位置 (南東から)



12. 2号礎石建物跡南辺部 (東から)



13. KS-1144・1059 磚石跡 (南から)



14. KS-1145・1144 磚石跡 (南から)



15. KS-994 集石遺構 (東から)



16. 志野向付 (I-347) 出土状況

写真図版3 第30次調査(造酒屋敷跡6次) 2区(1)



17. 西部北壁(南から)



18. 中央部南壁(北から)



19. 北部西壁(東から)



20. 北部(北から)



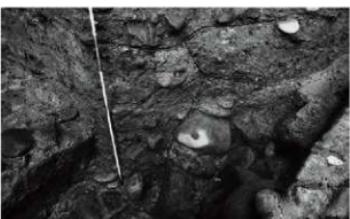
21. 北部東壁・近世の地表面(南西から)



22. KS-1134 暗渠状遺構(南から)



23. KS-687 石組遺構断面(西から)

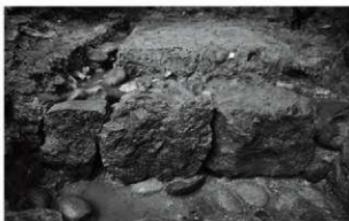


24. VII層・KS-687 石組遺構他断面(南東から)

写真図版4 第30次調査(造酒屋敷跡6次) 2区(2)



25. KS-1137 石組溝跡（南東から）



26. KS-1137 石組溝跡 西側縁石（東から）



27. KS-1137 石組溝跡 西側縁石の矢穴（東から）



28. KS-1137 石組溝跡 東側縁石（西から）



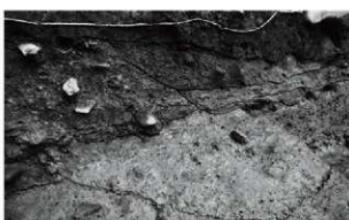
29. KS-1137 石組溝跡 西側VII層断面（東から）



30. KS-1137 石組溝跡 東側VII層断面（西から）



31. KS-1140 性格不明遺構（東から）



32. KS-1139 土坑（南西から）

写真図版5 第30次調査(造酒屋敷6次)出土遺物(1)



1 ~ 31 約 1/3

写真図版 6 第30次調査(造酒屋敷6次)出土遺物(2)



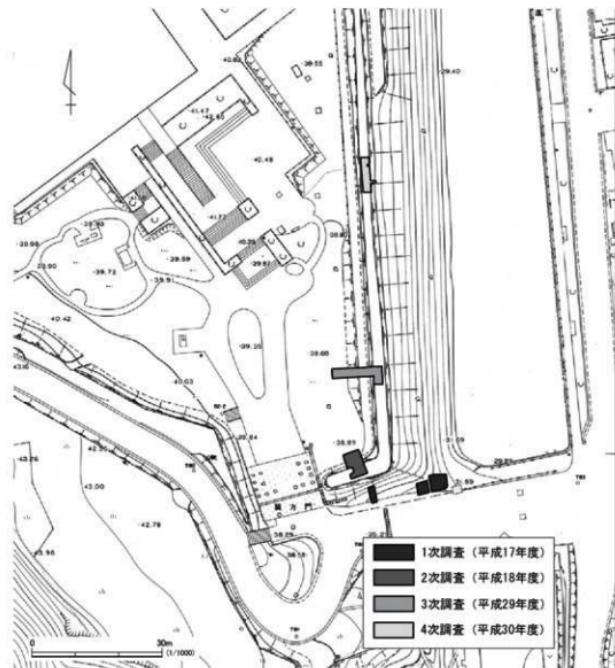
32～46 約1/6 48・50・51 約1/2 49 約1/1 47・53～57 約1/3

V. 第31次調査(三の丸土塁4次)

1. 調査の概要

(1) 調査目的

仙台城三の丸土塁は、『仙台城跡整備基本計画』(平成17年3月策定)において、「三の丸整備ゾーン」の「三の丸外構整備区域」として、「水堀や土塁等の近世城郭の外構としての遺構を顕在化」することや、「良好に保存されている土塁の修復」等の整備が計画されている。今回の調査は、これらの整備計画に基づいて長沼の西岸に沿って南北方向に伸びる土塁頂部に調査区を設定し、堀跡等の遺構確認を目的として実施した。なお、三の丸土塁については過去3次の調査を行っている。第2次(H18)・第3次(H29)調査において、同様に土塁上面の遺構確認を行なったが、堀跡等の遺構はこれまで確認されていない。



第25図 第31次調査地点の位置図

(2) 調査方法と調査経過

今回の第31次調査（三の丸土壌4次）は、第3次調査区から北側に約5m離れた場所に位置し、土壌上面の平坦面に南北8m・東西2mの調査区を設定した。また、調査区の東側にあたる長沼側に長さ、約1.2m・幅1mの範囲で調査区を拡張し、長沼側に落ち込む土壌外側斜面で壟跡に伴う遺構の検出作業を行った。

調査は、土壌上面の表土除去後に精査を行い、遺構の検出作業を行った。土壌上面は昨年度の調査では、地表から約20cm下で土壌積土に到達することが報告されているため、遺構の検出漏れが無いように慎重な掘下げと精査を行った。この結果、現積土の上面で横円形に広がる川原石の集石を2箇所で検出した。

土壌の積土の断面を観察するため調査区北西角部に東西1.4m・南北0.7mの範囲でサブトレンチを設定した。

2. 基本層序

基本層序は、現表土層から土壌積土上部まで、大別3層、細別6層に分層した。

I層は現表土層で、付近に植樹されている桜の根による搅乱が顕著にみられる。

II層は、円礫を含む灰黄褐色土で、2層に細分した。III層に比べてしまりが弱いため近世の土壌積土ないし近・現代の堆積土の可能性が考えられる。

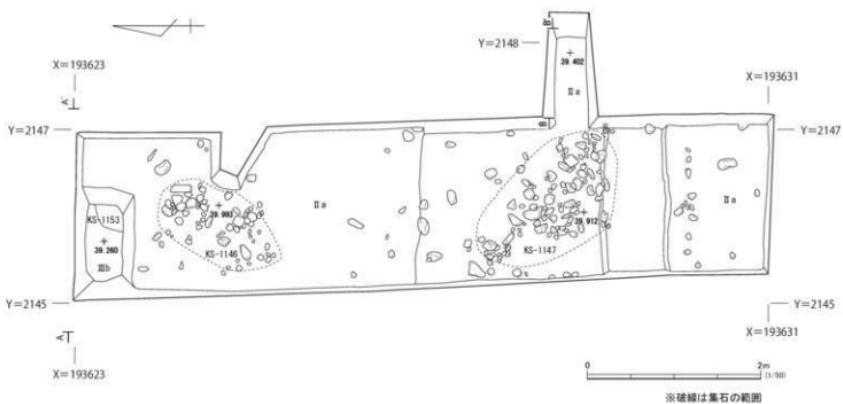
III層は、黄褐色で、2層に細分した。III a層は砂を多量に含み、III b層は明黄褐色粘土をブロック状に含む。縦まりの強い人が堆積土で、土壌積土と考えられる。昨年度3次調査の土壌積土（下部）にあたるXVI 1層と同一層である。

3. 検出遺構と遺物

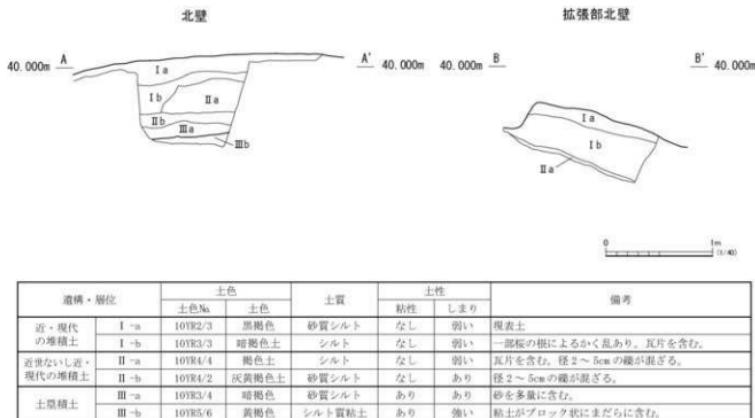
2箇所の集石については、掘り方が確認できず遺構か否か不明であるが、遺構番号を付して報告することとした。

KS-1146

調査区北側のII a層上面で検出した。径5~10cmの円錐が集石し、横円状に分布する。分布の範囲は長軸150cm、短軸80cmである。



第26図 第31次調査区平面図 (1/50)



第27図 第31次調査区断面図

KS-1147

調査区南側のII a層上面で検出した。径5~10cmの円礫が集石し、椭円状に分布する。分布の範囲は長軸200cm、短軸105cmである。埠に伴う遺構の可能性も考え。KS-1147から東側（長沼側）へ1.8m（1間）の地点を拡張し確認調査を行ったが、特に遺構は確認されなかった。

KS-1153

調査区北側サブトレンチ内のIII a層上面で検出した。平面形は不明である。検出した規模は、東西30cm以上、南北30cm以上である。東側はサブトレンチ外に延びる。遺構の時期は不明である。

4. 遺構外出土遺物

遺物は、I層で磁器6点、陶器3点、金属製品2点、土師質土器1点、瓦38点、金属製品2点、ガラス2点が出土した。II層では、瓦片19点が出土している。時期を特定できる遺物としては、I層で織部大鉢片が出土している。外面は経釉流で、年代は17世紀前葉と考えられる。昭和60年に実施された三の丸跡調査では、政宗の下屋敷跡と関連した池跡および茶室跡が確認されており、織部を含め茶器等の陶磁器が多数出土している（仙台市教育委員会 1985）。今回出土した遺物もこうした三の丸の性格を示す資料の一つである。

5.まとめ

土塁上面で椭円状に分布する2箇所の集石を確認した。2箇所の集石における中心点の距離は4mである。埠跡に係わる遺構との関係は不明である。三の丸土塁上面においては何らかの施設が存在したかどうかを明らかにするため、今後の更なる調査・検討が必要である。

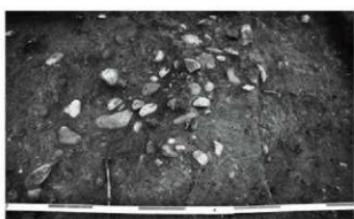
写真図版7 第31次調査(三の丸土塁4次)



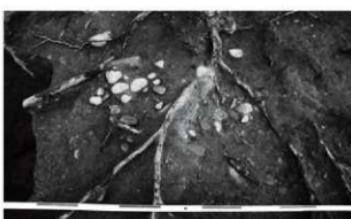
33. 調査区全景（西から）



34. 北壁・KS-1153（南から）



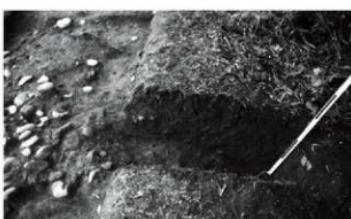
35. KS-1147（西から）



36. KS-1146（西から）



37. 東側（長沼側）拡張部（西から）



38. 東側（長沼側）拡張部（南から）



39. 調査風景（南から）



40. 職場体験作業風景

VI. 総括

第30次（造酒屋敷跡6次）調査では、1区で礎石跡4基（うち2基は過去の調査で確認済み）、集石遺構1基、溝跡2条、ビット2基、2区では近世の地表面の他、暗渠状遺構1条、石組溝跡1条、石組遺構（第2次調査では石組溝）1条、土坑2基を確認した。以下では、主に近世遺構について成果をまとめ、今後の課題について記述する。

(1) 2号礎石建物跡について

今回の調査では、南東角部および南辺部の礎石跡を確認し、建物の位置を知る手がかりが得られた。建物規模は、現時点では南北8間ないし9間以上、東西2間以上となる。特に南北の桁行については、2号礎石建物跡北端部のKS-917カマド跡（第3次調査）を建物内の施設とみるか否かで解釈が変わる。また、建物の北辺・西辺部については近代以降に削平され、今後も遺構が確認できる可能性は低い。よって建物規模については、整地層と遺構の関係を整理しつつ絵図史料等との比較も加え、更なる検討が必要である。

なお、2号礎石建物跡の時期は、KS-1144礎石跡の掘り方から出土した大堀相馬産の白濁釉陶器小壺の年代から、18世紀後半から19世紀前半と考えられる。これは、第3次調査で指摘されていた18世紀以降（中葉以降）とする見解と矛盾しない。また、礎石跡の直上を近代の堆積土が覆っていることから、この建物は、明治時代初め頃に解体された造酒屋敷最後の建物の一つである可能性が高い。

(2) 造酒屋敷地北側における登城路路面について

2区で確認した近世の地表面は、可能性は高いと考えるが、登城路路面と断定するには至っていない。今後も周辺の調査を継続し、地表面の状況や登城路に伴う側溝等の確認、地表面下における暗渠の延長方向や規模、そして路面の基盤となる整地や再整地が行われた年代の特定といった課題を解明していく必要がある。これは、2区で確認した近・現代道路の底面および壁面の観察を効果的に行うことで、今後、一定の成果が得られると期待される。

(3) 造酒屋敷地北辺部の施設について

2区で確認したKS-687石組遺構は、今回の断面観察では自然堆積土が確認できず、石列部の自然縫を据えた後、比較的の短期間に埋められたものと判断した。その性格については、屋敷地境界の側溝以外にも、土壠等の基礎といった可能性も今後検討する必要がある。なお、KS-687の方向（N~72°~E）は、KS-1137石組側溝および2号礎石建物跡南北軸の方向（N~18°~W）に直交する。また、造酒屋敷地における1～3号礎石建物跡の南北軸線は、巽門西脇石垣の南北軸線にはほぼ平行する。これは、造酒屋敷における建物、諸施設の基本軸線となっており、今後、礎石跡等の組み合わせを検討する際にも、念頭に置く必要がある。

(4) 三の丸土壠について

今回、土壠上面において2箇所の集石を確認した。明確な遺構としての評価は出来なかったが、今後、三の丸土壠の調査において土壠堆積土上面で同様の痕跡が一定間隔で発見されれば、土壠との係わりを検討できる可能性がある。

参考文献

- 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000
- 仙台市教育委員会『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告第76集 1985
- 仙台市教育委員会『仙台城10』仙台市文化財調査報告書第374集 2010
- 仙台市教育委員会『仙台城11』仙台市文化財調査報告書第395集 2011
- 仙台市教育委員会『仙台城12』仙台市文化財調査報告書第461集 2017
- 仙台市教育委員会『仙台城13』仙台市文化財調査報告書第471集 2018
- 仙台市歴史民俗資料館『特別展図録 はきものの民俗』 2003

報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと						
書名	仙台城跡 14						
副書名	—平成 30 年度 調査報告書—						
巻次	14						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 479 集						
編著者名	鈴木隆、須貝慎吾、加藤智仁						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒 980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目 5 番 12 号 上杉分庁舎 TEL 022-214-8544						
発行年月日	2019 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	ふりがな 調査拠点	コード		調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号			
			04100	01033			
せんだいじょうあと 仙台城跡	宮城県仙台市 青葉区川内地内	せらしゅやしきあと 造酒屋敷跡 (6 次) 〔第 30 次調査〕	38° 15'	140° 51'	2018.6.25 ~	334 m ²	重要遺跡 の遺構確 認調査
		17° 26"	26°	2018.11.29			
		38° 15'	140° 51'	2018.10.1 ~			
	まんのまるごと 三の丸土壘 (4 次) 〔第 31 次調査〕	21° 28"	28°	2018.11.29	17 m ²		
		38° 15'	140° 51'	2018.10.1 ~			
		17° 26"	26°	2018.11.29			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡、石組遺構、石敷、溝跡、陶磁器、土器、瓦、土坑、集石			金属製品、木製品	
要約	国庫補助事業として仙台城跡第 30 次、31 次調査を実施した。第 30 次調査の造酒屋敷跡では、造酒屋敷内の建物に係わる礎石跡のほか、近世の石組構、土坑、集石遺構を確認し、陶器、磁器、瓦、木製品などが出土した。また、清水門石垣付近で、近世の地表面を確認した。第 31 次調査の三の丸土壘跡では、土壘頂部で 2 箇所の集石を確認した。遺物は陶器、磁器、瓦が出土した。						

仙台市文化財調査報告書第479集
仙 台 城 跡 14

— 平成30年度 調査報告書 —
2019年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉一丁目5番12号

仙台市役所上杉分庁舎

文化財課 TEL 022 (214) 8544

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

宮城県仙台市宮城野区赤竹二丁目1-14

TEL 022 (230) 2285 (代)
